

## 基本計画書

基本計画											
事項	記入欄								備考		
計画の区分	研究科の専攻の設置										
フリガナ設置者	コクリツカクイカクホウジン ナラキョウイクカクイカク 国立大学法人奈良教育大学										
フリガナ大学の名称	ナラキョウイクカクイカクイカク 奈良教育大学大学院 (Nara University of Education, Graduate School)										
大学の位置	奈良県奈良市高畑町										
大学の目的	奈良教育大学は、学芸の理論とその応用とを教授研究し、高い知性と豊かな教養とを備えた人材、特に有能な教育者を育てるとともに、この地方に特色のある文化の向上を図ることを目的とする。										
新設学部等の目的	専門職学位課程は、高度の専門性が求められる教職を担うための深い学識及び卓越した教育実践能力を培うことを目的としている。										
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地			
	教育学研究科 〔Graduate School of Education〕 教職開発専攻 〔School of Professional Development in Education〕 計	2  計	50  50	-  -	100  100	教職修士 (専門職) 【Master of Education (Professional)】	令和4年4月 第1年次	奈良県奈良市高畑町			
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	奈良教育大学大学院 教育学研究科 修士課程 人間発達専攻 (廃止) (△9) (令和4年4月) ※令和4年4月学生募集停止 教科教育専攻 (廃止) (△36) (令和4年4月) ※令和4年4月学生募集停止										
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数					
	教育学研究科 教職開発専攻	講義	演習	実験・実習	計	46 単位					
		67 科目	65 科目	4 科目	136 科目						
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等		
	新設	教育学研究科 (専門職学位課程) 教職開発専攻			44 人 (44)	39 人 (39)	1 人 (1)	0 人 (0)	84 人 (84)	0 人 (0)	50 人 (50)
		教育学研究科 (修士課程) 伝統文化教育・国際理解教育専攻			5 (5)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	5 (5)
		計			49 (49)	42 (42)	1 (1)	0 (0)	92 (92)	0 (0)	-
	既設	-			-	-	-	-	-	-	-
		-			-	-	-	-	-	-	-
計			-	-	-	-	-	-	-		
合計			49 (49)	42 (42)	1 (1)	0 (0)	92 (92)	0 (0)	-		

【基礎となる学部】  
教育学部  
14条特例の実施  
教職大学院

令和3年8月届出  
済み (予定)

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体				
	事 務 職 員		55 人 (55)	0 人 (0)	55 人 (55)					
	技 術 職 員		6 (6)	0 (0)	6 (6)					
	図 書 館 専 門 職 員		2 (2)	0 (0)	2 (2)					
	そ の 他 の 職 員		1 (1)	0 (0)	1 (1)					
	計		64 (64)	0 (0)	64 (64)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
	校 舎 敷 地	0 m <sup>2</sup>	87,896 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	87,896 m <sup>2</sup>					
	運 動 場 用 地	0 m <sup>2</sup>	26,537 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	26,537 m <sup>2</sup>					
	小 計	0 m <sup>2</sup>	114,433 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	114,433 m <sup>2</sup>					
	そ の 他	0 m <sup>2</sup>	1,617,596 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	1,617,596 m <sup>2</sup>					
	合 計	0 m <sup>2</sup>	1,732,029 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	1,732,029 m <sup>2</sup>					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
		0 m <sup>2</sup> ( 0 m <sup>2</sup> )	27,066 m <sup>2</sup> ( 27,066 m <sup>2</sup> )	0 m <sup>2</sup> ( 0 m <sup>2</sup> )	27,066 m <sup>2</sup> ( 27,066 m <sup>2</sup> )					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	28 室	28 室	38 室	6 室 (補助職員 3 人)	0 室 (補助職員 0 人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数		大学全体				
		教育学研究科 教職開発専攻		86 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体		
		教育学研究科 教職開発専攻	357,087 [48,890] (350,531 [48,174])	8,103 [3,175] (8,103 [3,175])	2,281 [2,281] (2,281 [2,281])	883 (883)	412 (412)		0 (0)	
	計	357,087 [48,890] (350,531 [48,174])	8,103 [3,175] (8,103 [3,175])	2,281 [2,281] (2,281 [2,281])	883 (883)	412 (412)	0 (0)			
	図 書 館		面積	閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		3,388 m <sup>2</sup>	373	356,222冊						
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要				大学全体			
		1,028 m <sup>2</sup>	屋 外 プ ー ル テ ニ ス コ ー ト							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による
		教員1人当り研究費等								
		共同研究費等								
		図書購入費								
	設備購入費									
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		千円	千円	千円	千円	千円	千円			
		学生納付金以外の維持方法の概要								
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	奈良教育大学								
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	教育学部 学校教育教員養成課程	年	人	年次人	人	学士(教育)	1.05	平成24年度	奈良県奈良市高畑町	
	教育学研究科 (修士課程)									
	人間発達専攻	2	-	-	-	修士(教育学)	-	平成28年度	奈良県奈良市高畑町	
	教科教育専攻	2	-	-	-	修士(教育学)	-	平成16年度	奈良県奈良市高畑町	
教育学研究科 (専門職学位課程) 教職開発専攻	2	-	-	-	教職修士(専門職)	-	平成20年度	奈良県奈良市高畑町		

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：附属中学校          目的：本学における児童、生徒又は、幼児の教育又は保育に関する研究並びに教育実習計画に従い学生の教育実習の実施          所在地：奈良市法蓮町2058-2          設置年月：1947年4月          規模等：土地面積30,079㎡、建物面積5,787㎡</p> <p>名称：附属小学校          目的：本学における児童、生徒又は、幼児の教育又は保育に関する研究並びに教育実習計画に従い学生の教育実習の実施          所在地：奈良市高畑町          設置年月：1889年4月          規模等：建物面積8,880㎡</p> <p>名称：附属幼稚園          目的：本学における児童、生徒又は、幼児の教育又は保育に関する研究並びに教育実習計画に従い学生の教育実習の実施          所在地：奈良市高畑町          設置年月：1927年4月          規模等：建物面積1,013㎡</p>	
----------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「－」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要															
(教育学研究科教職開発専攻)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専攻共通科目	施編教に成育領域に課すび程る実の	ESD-SDGsの理論と実践	1前・後		2		○			2					共同
		教育課程の開発と改善	1後		2		○		1						
		特別支援教育の教育課程論	1前		2		○		1	1					ホニバス
	方実践教なる法的科領域にな等域関指のす導実	指導と評価の一体化	1前		2			○		1					
		道徳教育の理論と実践	1前		2			○						兼1	集中
		ユニバーサルな授業デザイン	1後		2		○			1					
	にび生関教徒域す育指る相導領域談及	生徒指導と子どもの心	1後		2		○		3	1					ホニバス・共同(一部)
		発達理論と教育実践	1前		2		○			1					
		発達障害児の理解と支援	1前		2		○		1		1				ホニバス
	にび学関学級域す校経る経営領域管及	学級経営の基礎・基本	1前		2			○		1					
		学校組織とアカウンタビリティ	2前		2		○			1					
		特別支援教育と学校・学級経営	1後		2		○		1						
	方教学に員校関の教育す存在り	教師の発達とキャリア教育	1前		2		○		1						
		学校危機管理論	1後		2		○							兼1	集中
		インクルーシブ教育原論	1後		2		○							兼1	
	小計(15科目)	—	0	30	0		—	6	8	1			兼3		
実践科目	実習科目	課題探求実習	1通	5				○	13	13	1				
		課題解決実習A	2通		5			○	12	12					
		課題解決実習B(特別支援教育)	2通		5			○	2	1	1				
		へき地学校実習	1・2前		2			○	2	5					集中
		小計(4科目)	—	5	12	0		—	13	13	1				
	演習科目	遠隔教育実践演習	1後		2			○	2	2					集中・共同
		デジタル教材作成演習	1前		2			○		1					集中
		学習の基盤力向上のためのICT活用演習	1前		2			○		1					集中
		STEAM教育演習	1後		2			○						兼5	集中・ホニバス・共同(一部)
		授業力応用演習	1前		2			○		1					集中
		授業力基礎演習	1前		2			○		3				兼1	集中
		小計(6科目)	—	0	12	0		—	2	5				兼6	
研究科目	研究科目	課題研究Ⅰ	1前・後	2			○		44	36	1				
		課題研究Ⅱ	2前・後	2			○		44	36	1				
		小計(2科目)	—	4	0	0		—	44	36	1				
専門科目	学校教育マネジメント科目	カリキュラム・マネジメント実践論	1・2後		2			○	2						ホニバス・共同(一部)
		教師の成長と授業研究	1・2前		2		○		1						
		地域とつくる学校	1・2前		2		○		1						
		学級・学校づくりと特別活動	1・2後		2			○		1					
		学級経営実践論	1・2前		2			○		1					
		学級集団づくりの実践分析研究	1・2後		2			○		1					
		ESDと総合的な学習の時間特講	1・2後		2			○		1					
		ESDカリキュラムマネジメント	1・2前		2		○			1					

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	学校教育マネジメント科目	ESDと地域創生		2			○			1						
		SDGsフィールドワーク	1・2前		2			○			1					
		ESDと郷土教育・総合学習	1・2前		2			○			1					
		学校教育の情報化特論	1・2前		2			○			2					共同
		教育のためのデータサイエンス	1・2後		2			○			1					
		体系的なプログラミング教育	1・2後		2				○			2				共同
		授業支援ツールを活用した授業設計	1・2前		2				○			2				共同
		小計 (15科目)	—	0	30	0		—			7	7				
	教育発達支援科目	学校教育と心理学	1・2前		2			○							兼1	集中
		子どもの「学び」と心理学	1・2前		2			○							兼1	
		教育と臨床	1・2前		2			○			1					
		子どもの発達の理解と支援	1・2後		2				○						兼2	集中・オムニバス
		学校臨床の理論と実践	1・2前		2			○			1					
		学級集団と心理学	1・2前		2			○			1					
		教育支援と子どもの権利	1・2前		2			○							兼1	
		学級集団のアクションリサーチ	1・2後		2				○			1				集中
		子どもの権利を踏まえた教育支援の実践	1・2後		2				○						兼1	
		保育・幼児教育の内容論と実践の展開	1・2前		2				○			1				
		幼小連携・接続の理論と実践の展開	1・2後		2				○			2				共同
		幼年教育の理論と実践	1・2前		2			○				1				
		魅力ある幼稚園・保育所・こども園等の運営	1・2後		2				○			2				共同
		幼年心理の理論と保育	1・2前		2			○				1				
		幼児理解を深めるための実践研究	1・2後		2				○				1			
		子ども家庭福祉の理論と実践	1・2前		2			○							兼1	
		子育て支援の理論と実践	1・2後		2				○						兼1	
		保育・幼児教育の質の確保と向上	1・2前		2			○							兼1	集中・隔年
		保育・幼児教育の質的研究	1・2前		2				○						兼1	集中・隔年
		LD児・ADHD児の理解と支援	1・2後		2			○							兼1	集中
特別支援教育の生理・病理	1・2後		2			○				1						
重度障害児の理解と支援	1・2前		2			○				1						
特別支援教育アセスメント事例研究	1・2前		2			○				2	1	1		兼1	オムニバス	
特別支援教育コーディネーター論	1・2後		2			○				2	1	1		兼1	オムニバス	
特別支援教育のシステム論	1・2後		2			○				1						
特別支援教育の心理学	1・2前		2			○							兼1			
自閉症児の理解と支援	1・2後		2			○					1					
小計 (27科目)		0	54	0					6	3	1			兼10		
教科教育科目	ESDとしての教育実践 (言語・社会科学領域)	1・2前		2			○				1			兼5	集中・オムニバス・共同 (一部)	
	ESDとしての教育実践 (理数・生活科学領域)	1・2前		2			○				1			兼5	集中・オムニバス・共同 (一部)	
	ESDとしての教育実践 (芸術・保健体育領域)	1・2前		2			○				1			兼5	集中・オムニバス・共同 (一部)	
	教科の原理と授業づくり (国語)	1・2前		2			○				2	1			オムニバス	
	ICTを含む授業実践 (国語)	1・2後		2				○			2	1			オムニバス・共同 (一部)	
	教科内容と教材開発 (古典文学) I	1・2前		2				○			1	1			兼1	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	教科教育科目	教科内容と教材開発（古典文学）Ⅱ	1・2後		2			○		1	1					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（近代文学）Ⅰ	1・2前		2			○		2						○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（近代文学）Ⅱ	1・2後		2			○		2						○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（語彙・文法）	1・2前		2			○							兼1	集中
		教科内容と教材開発（音声言語）	1・2後		2			○		1					兼1	○ムニバス・共同（一部）
		教科の原理と授業づくり（社会）	1・2前		2			○		3	2					○ムニバス・共同（一部）
		ICTを含む授業実践（社会）	1・2後		2			○		1	2				兼1	○ムニバス
		教科内容と教材開発（社会・地理歴史Ⅰ）	1・2前		2			○		3	1					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（社会・地理歴史Ⅱ）	1・2後		2			○		3	1					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（社会・公民Ⅰ）	1・2前		2			○		1	2				兼1	○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（社会・公民Ⅱ）	1・2後		2			○		1	2				兼1	○ムニバス・共同（一部）
		教科の原理と授業づくり（英語）	1・2前		2			○		1						
		教科内容と教材開発（テキストをスピーキングに活かす）	1・2前		2			○		2	2					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（テキストをライティングに活かす）	1・2後		2			○		2	2					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（英文法指導）	1・2前		2			○		2	2					○ムニバス・共同（一部）
		Organizing your classroom talk and assignments effectively	1・2後		2			○			1					
		教科の原理と授業づくり（小学校外国語）	1・2前		2			○		1						
		ICTを含む授業実践（小学校外国語・英語）	1通		2			○		2						○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（小学校外国語）	1・2後		2			○		1					兼1	共同
		教科の原理と授業づくり（算数・数学）	1・2前		2			○		1	1					○ムニバス
		ICTを含む授業実践（算数・数学）	1・2後		2			○		4	2					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（解析）	1・2前		2			○		1	1					○ムニバス
		教科内容と教材開発（確率・統計）	1・2後		2			○		1	1					○ムニバス
		教科内容と教材開発（コンピュータ・応用数学）	1・2後		2			○		1	1					○ムニバス
		教科内容と教材開発（代数）	1・2前		2			○		2						○ムニバス
		教科内容と教材開発（幾何）	1・2後		2			○			1				兼1	集中・○ムニバス
		教科の原理と授業づくり（理科）	1・2前		2			○		5						○ムニバス・共同（一部）
		ICTを含む授業実践（理科）	1・2後		2			○		3	2				兼2	○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（理科：物理分野）	1・2後		2			○		3					兼1	○ムニバス・共同
		教科内容と教材開発（理科：化学分野）	1・2後		2			○		3						○ムニバス・共同
		教科内容と教材開発（理科：生物分野）	1・2後		2			○		2	1				兼1	○ムニバス・共同
		教科内容と教材開発（理科：地学分野）	1・2後		2			○		2	1				兼1	○ムニバス・共同
		教科の原理と授業づくり（技術）	1・2前		2			○		1	2					○ムニバス・共同（一部）
		ICTを含む授業実践（技術）	1・2後		2			○		1	2					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（技術：電気情報分野）	1・2前		2			○		1	1					○ムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発（技術：栽培分野）	1・2前		2			○			2					○ムニバス・共同（一部）
教科の原理と授業づくり（家庭科）	1・2後		2			○		2	2				兼1	集中・○ムニバス・共同（一部）		
ICTを含む授業実践（家庭科）	1・2後		2			○		2	2				兼1	集中・○ムニバス・共同		
教科内容と教材開発（生活デザイン領域）	1・2前		2			○		1	2				兼2	集中・○ムニバス・共同（一部）		
教科内容と教材開発（生活科学基礎実験領域）	1・2前		2			○		1	1				兼2	集中・○ムニバス・共同（一部）		
教科内容と教材開発（健康生活領域）	1・2後		2			○		2	2					○ムニバス・共同（一部）		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	教科教育科目	教科の原理と授業づくり (音楽)		2		○			2	2					オムニバス・共同(一部)	
		ICTを含む授業実践 (音楽)	1・2前		2			○		2	2					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (鑑賞・創作)	1・2後		2			○		2	2					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (表現領域・ピアノ)	1・2後		2			○		2	2					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (表現領域・声楽)	1・2前		2			○		2	2					オムニバス・共同(一部)
		教科の原理と授業づくり (図画工作・美術)	1・2前		2			○		2						オムニバス・共同(一部)
		ICTを含む授業実践 (図画工作・美術)	1・2後		2			○		1	1					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発<絵画分野・絵に表す-平面的な造形表現>	1・2前		2			○		1	1					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発<工芸分野・デザイン分野・工作に表す-用途のある造形表現>	1・2前		2			○		1	1					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発<彫刻分野・立体に表す・造形遊び-立体的な造形表現>	1・2後		2			○		1	1					オムニバス・共同(一部)
		教科の原理と授業づくり (書道)	1・2前		2			○							兼4	オムニバス・共同(一部)
		ICTを含む授業実践 (書道)	1・2後		2			○							兼3	オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (漢字書法)	1・2前		2			○							兼3	オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (書道史)	1・2後		2			○							兼3	オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (書道作品鑑賞)	1・2前		2			○							兼4	オムニバス
		教科の原理と授業づくり (保健体育)	1・2前		2			○		1	1					オムニバス
		ICTを含む授業実践(保健体育)	1・2後		2			○		2	4					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (運動領域)	1・2後		2			○		1	1					オムニバス
		教科内容と教材開発 (体育理論領域)	1・2前		2			○		1	1					オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発 (保健領域)	1・2後		2			○		1	1					オムニバス
小計 (67科目)		-	0	134	0	-		33	25					兼30		
合計 (136科目)		-	9	272	0	-		44	39	1				兼50		
学位又は称号		教職修士 (専門職)			学位又は学科の分野			教員養成関係								
修了要件及び履修方法							授業期間等									
<ul style="list-style-type: none"> <li>専攻共通科目 (共通五領域) : 16単位以上選択必修 (各領域2単位以上必修)</li> <li>実践科目 (実習科目) : 10単位以上選択必修</li> <li>実践科目 (演習科目) : 4単位以上選択必修</li> <li>研究科目 : 4単位必修</li> <li>専門科目 : 12単位以上選択必修</li> <li>計46単位以上</li> </ul> ※実践科目の実習科目について、「課題探求実習」5単位を必修とし、「課題解決実習A」5単位又は「課題解決実習B (特別支援教育)」5単位を選択必修とする。 ※現職教員に関しては、実践科目における実習科目のうち「課題探求実習」を取得したものとみなす。 (履修科目の登録の上限 : 38単位 (年間))							1学年の学期区分		2期							
							1学期の授業期間		15週							
							1時限の授業時間		90分							

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学研究科教職開発専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻共通科目	ESD-SDGsの理論と実践	『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践-現職教員と学生のために-』 2015年の国連持続可能な開発サミットにおいて、「我々の世界を変革する/持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。また、学校教育においては、学習指導要領に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記された。持続可能な社会は市民が能動的に創造・創造に参加する必要があることから、今後もこの方針は継続されるものと考えられる。本授業においては、テキスト講読を通じてSDGs及びESDに関する基本的理解を深め、自らが選択したテーマについて教材開発を行い、探究的な授業構想図の作成を行うことで、ESDの担い手として求められる資質・能力の育成を図る。 (61 中澤静男) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (78 大西浩明) 副担当として、授業の実務的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
	教育課程の開発と改善	現代の教育課題をとらえ、その課題解決のために必要な資質・能力を育成できる学校、子どもたちが学びたい・生きたい学校にするにはどうあるべきか。子ども、保護者、地域等のニーズを適切に把握し、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取り組みが一層求められている。 この授業では、教育課程の意味を正しく理解し、教育課程の編成・実施・評価についての具体的な手法を学び、一人一人が特色ある教育課程を提案し、発表・討議を通して課題を共有する。	
	特別支援教育の教育課程論	特別支援教育の教育課程を構成するために必要な基本的な概念と要件を検討する。障害児学校の教育課程の歴史的な変遷を概観し、領域と指導形態の二重構造、自立活動を主とする教育課程、教育課程と個別の指導計画・個別の教育支援計画との関係などを検討する。その上で、今日的課題として、教育課程の実施における合理的配慮、通常教育課程との連続性と障害がある場合の固有性の関係などについて論ずる。また、特別支援学級および通級による指導における教育課程の考え方についても整理する。 (オムニバス方式/全15回) (18 越野和之/8回) 全15回のうち、第1回から第8回までを担当し、特別支援教育における教育課程の歴史的変遷と基本的な原理、構造および論点について講ずる。 (67 堀田千絵/7回) 全15回のうち、第9回から第15回までを担当し、教育法法学の立場から、特別支援学校における障害種別毎の教育課程の特徴、特別支援学級の教育課程と通常学級との連続性などについて講ずる。	オムニバス
	指導と評価の一体化	「指導と評価の一体化」ということが言われて久しい。教師の指導には完成形はなく、個々の学習者や刻々と変わる状況に応じて絶えず改善していくことが求められる。評価はそうした役割の中心を担うものとして期待されている。 本授業では、指導の絶えざる改善を支える評価の意義について理解し、評価をとおして指導や学習を振り返り、そこから得られた情報を活用して、その後の指導や学習を改善することのできる実践的力量的形成を目指す。そのためには、「客観的に評価をするということ」について理解することはもちろんのこと、教育的意図や教育の目的に応じた評価の工夫や方法についても理解する必要がある。こうした様々な側面から深く評価について学びを深め、教師として必要な評価の専門性を獲得する。	
	道徳教育の理論と実践	道徳教育は、自己の生き方及び人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育成する教育活動である。道徳の意義や原理等を踏まえ、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育及びその要となる道徳科の目標や内容、指導計画、評価等を理解するとともに、授業映像を通して授業改善の視点を身に付け、実際に低、中、高学年、中学校の発達の段階ごとの具体的な教材について教材研究や学習指導案作成を行うことにより、学校の道徳教育推進の体制づくりや教員への道徳授業に関する指導助言ができるようにする。	
	ユニバーサルな授業デザイン	本授業は、特別支援教育の動向を踏まえつつ、特別支援学校と通常の学校との接続を意識したユニバーサルな授業デザインにかかわる理論、技法に基づいた実践的な取り組みを考える。講義の前半においては、知的障害並びに発達障害のある子どもの学びの過程の困難さとその手立てに関する特別支援教育の知見を踏まえ、これらに基づくユニバーサルな授業デザインの理論と技法について理解を深める。後半では、前半を踏まえた授業デザインの実践をみていくことで、ユニバーサルな授業デザインの実践的な理解を目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻共通科目	生徒指導と子どもの心	<p>学校教育における生徒指導・キャリア教育の意義と方法について、歴史的考察を踏まえながら講義し、これからの生徒指導・キャリア教育の在り方について論究する。</p> <p>本授業の到達目標は以下の4点である。①生徒指導（進路指導）の意義と課題について説明できる。②青年期の心理と多様な生徒理解の方法について説明できる。③学校で生起する生徒指導上の諸問題への対応と方法について説明できる。④生徒指導における教育相談の意義と進め方について説明できる。生徒指導上の諸課題について、学校心理学の視点から捉えることができる。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）  （1 粕谷貴志／4回）  体制や意義、一般的な方法等、生徒指導という枠組みについて、諸事例の紹介や検討等も含めながら概説していく。  （46 石井僚／4回）  生徒指導の実践的な内容として、個の視点と集団の視点から子どもや事象を捉え、予防的な観点も含めた支援の必要性等について説明する。  （9 市来百合子／4回）  児童生徒の発達過程の中で起こる心理的・教育的課題について適切に捉え、個々の成長・発達を支援するために必要な、理論的・実践的知識や学校カウンセリングに関する技術を習得する。  （2 河崎智恵／2回）  キャリア教育を具体的に展開していくにあたって必要となる校内体制やシステム、年間指導計画等について、その実際や今後の課題を含めて解説する。  （1 粕谷貴志、46 石井僚、9 市来百合子、2 河崎智恵／1回）（共同）  統合的な理解のため、各回の学習内容をつなげ、全体のまとめを行う。</p>	オムニバス・共同（一部）
	発達理論と教育実践	<p>発達の理論から、教育実践についての理解を深めることを目的とする。具体的には、認知、自己、社会、感情の各発達領域に関わる理論を学び、自分自身の発達過程や身近な子どもの発達状況、具体的な実践的課題との関連について検討することで理解を深める。</p> <p>授業を通して、以下のことができるようになることを到達目標とする。</p> <p>①教育実践に関わる発達の理論について知識を獲得する  ②教育実践の具体的課題について、発達理論をもとに説明を行う  ③自分自身の発達過程や身近な子どもの発達状況をふり返り、発達理論との関連や理論的視点を持つことの重要性を理解する</p>	
	発達障害児の理解と支援	<p>発達障害のある子どもの発達と障害について、最近の子どもの発達の特徴や変化、最新の知見や話題などを児童精神医学、小児神経医学、脳科学の立場から、事例を中心に講義する。実際の事例について、支援を必要としている児をアセスメント（評価）し、理解し、その児に応じた実践的な支援が出来るようになる。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）  （23 全有耳／8回）  全15回のうち第1回から第8回を担当し、障害児医学の立場から、発達障害の理解とアセスメントなどについて講ずる。  （73 富井奈菜実／7回）  全15回のうち第9回から第15回を担当し、発達心理学の立場から、発達障害のある子どもの発達の理解について講ずる。</p>	オムニバス
	学級経営の基礎・基本	<p>学級経営上必要とされる事項に関して、事例を通して研究する。今日的な課題を把握し、その課題解決のための方途を考え、ディスカッションにより思考を深める。学校組織の観点から学級経営を考えることができるようにするとともに、保護者等との協力体制を構築することができる資質を養う。教育時事なども取り上げ、対応力の向上と表現力を高める。</p> <p>具体的な場面を想定し、実践的対応力を身に付ける。また、事例研究や自己の課題追究についてのレポートを作成する。</p>	
	学校組織とアカウントビリティ	<p>学校経営（運営）上、日々直面する様々な場面と解決への取組、また、それをどのように説明していくかについて事例を通して研究する。チュートリアル型の正解のない議論を通して問題解決へのアプローチ方法を身につけ、問題に対する対応力の向上を図る。主体的な学びにつなげるため、レポート等の課題提出を求める。</p> <p>学校組織のマネジメント力とは何かを考え、マネジメント力を高めるためには何が必要かを議論し、組織として説明責任を果たす上で、責任の所在の考え方や教職員個人が担う役割は何かなどについて研究する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専攻共通科目	特別支援教育と学校・学級経営	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提として、通常の小・中学校、高等学校の学校経営における特別支援教育の諸課題、具体的には、特別支援学級・通級指導教室の運営、特別支援教育コーディネーターと校内委員会の役割、通常学級での障害児の学びや就学の支援、特別支援学校および保健医療福祉諸機関との連携などについて論じる。あわせて、特別支援学校の組織的運営に関する諸課題についても論ずる。具体的には、各教育階梯ごとの学部運営に関わる諸課題と、各学部間をつなぐ課題、障害・発達・生活に視点をあてた教育実践を充実させるための組織的運営の開発、地域における特別支援学校のセンター的役割や交流・共同学習の運営について検討する。		
	教師の発達とキャリア教育	本授業では、まず、自らのキャリアの振り返り、教職に関わる自己理解を深めるとともに、教師のキャリア発達について理解し、自らの教職キャリアについて展望する。これらの活動をもとに、自己のキャリア発達の知見を教育実践へとつなげ、学校等におけるキャリア教育の目的・内容を理解した上で、キャリア教育の内容・方法について学ぶ。 本授業の目標は以下の通りである。 ①教師の発達プロセスを理解した上で、自らの教職キャリアの振り返り・教職理解及び展望を行う。 ②キャリア教育の目的・内容について理解し、キャリア教育・カウンセリングの方法について知る。		
	学校危機管理論	学校危機への理解能力を養い、対処方法を身に付けるようにする。 ① 学校事故（校内、校外、物的・人的に亘って）についてそれぞれの態様、対処、責任関係等 ② いじめに対する法的対処方法の検討 ③ 保護者等によるクレームに対する法的対処方法の検討 ④ 非行の発生機序、発生防止と発生後の対応 ⑤ その他、学校危機一般についての諸相及びその対策 ⑥ 法教育（模擬裁判の実演を含む。） について、それぞれ、講義、演習を行い、それに加えて、見学実習及び関係機関からの講師による講義（院生の希望により、見学実習先及び関係機関からの講師の選択を行う。なお、見学先としては、少年鑑別所、刑事公判廷、家庭裁判所、児童相談所、自立支援施設、少年院等。なお、他講座における見学先と重複しないように配慮する。）等を行なう。		
	インクルーシブ教育原論	インクルーシブ教育は、排除のない教育を実現し、特に学習上・生活上の困難を持ち、それゆえに特別なニーズをもつ子どもの発達を保障することを通じて、「共生社会」を実現していく役割を持つ。本講義では、ノーマライゼーション、インテグレーションなどの取組など、国際的な流れを概括するとともに、それをインクルーシブ教育として再構築する試みの到達点を吟味し、あわせてわが国のインクルーシブ教育への試みや実践的努力を検討する。インクルーシブ教育の実現のために、ユニバーサルデザイン教育、合理的配慮および特別支援を構造的に整備し、教育の条件整備のもとで教育実践を充実させることが課題となることを論じる。		
実践科目	実習科目	課題探求実習	連携協力校において、幅広い校務経験・指導補助等を通して幼児・児童・生徒の実態や教員の職務に関する理解を深め、教育課題の探求・分析を行う。また、授業実践を10時間程度行い、学校教育の実情を深く知るとともに課題解決実習の基礎となる授業力の向上を目指す。 連携協力校（幼・小・中・高・特別支援）の中から、志望する校種の学校で実習を行う。 5月から12月までの毎週金曜日及び9月中旬から11月初旬までの間に4週連続実習、計225時間（29日）分の日程を連携協力校と院生・指導教員と相談の上、設定。 実習において経験したことや学んだことについて、連携校教員、教職大学院担当教員と協議実習期間中に3回、院生同士のカンファレンスを行い、担当教員から指導助言する。	
		課題解決実習 A	連携協力校等において、幅広い校務経験・指導補助等を通して幼児・児童・生徒の理解や学校組織・地域連携等に関する理解を深め、教育課題を追究する。 上記教育課題の解決に向けた授業実践や更に幅広く教育実践の発展や改善に資する研究を基にした授業実践等を行い、分析・検証する。 教育実践の発展や改善に資する研究を基にした授業実践等を行い、分析・検証する。 現職教員院生は置籍校で、その他の院生は連携協力校（幼・小・中・高）の中から、志望する校種の学校で実習を行う。 5月から12月までの毎週金曜日及び9月中旬から11月初旬までの間に4週連続実習、計225時間（29日）分の日程を連携協力校と院生・指導教員と相談の上、設定。 実習において経験したことや学んだことについて、連携校教員、教職大学院担当教員と協議実習期間中に3回、院生同士のカンファレンスを行い、担当教員から指導助言する。	
		課題解決実習 B（特別支援教育）	連携協力校等において、特別支援教育を中心に、幅広い校務経験・指導補助等を通して教育課題を追究するとともに学位研究報告に関連した授業実践を行い、分析・検証する。 教育実践の発展や改善に資する研究を基にした授業実践等を行い、分析・検証する。 現職教員院生は置籍校で、その他の院生は連携協力校（特別支援学校、小・中学校の特別支援学級、通級指導教室、通常学級等、さらに高等学校等）の中から、志望する校種の学校で実習を行う。 5月から12月までの毎週金曜日及び9月中旬から11月初旬までの間に4週連続実習、計225時間（29日）分の日程を連携協力校と院生・指導教員と相談の上、設定。 実習において経験したことや学んだことについて、連携校教員、教職大学院担当教員と協議実習期間中に3回、院生同士のカンファレンスを行い、担当教員から指導助言する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実 習 科 目	へき地学校実習	十津川サマースクールの実施により、へき地少数教育の現状に学ぶとともに、小規模校の児童に学ぶ喜びや多くの人と接する楽しさを伝え、院生自身が視野を広げ教員としての専門性と実践力を高める。 十津川サマースクール（交流学習）の計画立案及び運営 十津川村教育委員会等関係者との事前調整 交流学習内容の事前準備（指導案立案・教材作成等） 事後アンケート等による振り返り 事業報告書の作成	
	遠隔教育実践演習	これまでに実践された、ビデオカンファレンスを活用した実践事例をもとに、実践時の指導の留意点や、応じて高めていく学習の基盤の資質・能力について、指導法に関する検討を進める。 (10 伊藤剛和) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (37 古田壮宏) 副担当として、授業の技術的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。 (77 竹村謙司) 副担当として、授業の実務的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。 (76 小崎誠二) 副担当として、授業の実務的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
	デジタル教材作成演習	1人1アカウントを取得した環境下でのデジタルコンテンツやクラウドの活用について、実践事例に基づいて指導場面ごとに検討するとともに、コンテンツの基礎的な開発技法の修得を目指す。 第1～3回は、LMS上で自学による実習をおこなう。 第3回目までの活動を完了させた上で、第4～11回は、集中講義型で受け、決められた期間内で活動する。 第12～15回は、社会で業務に関わっているスペシャリストや学校から実践者を迎えるなど、実践事例を踏まえて授業設計を考え、教員の情報活用能力の向上について研究協議をおこなう。	
	学習の基盤力向上のためのICT活用演習	教員免許取得に必須の内容・技能を修得した受講生を対象に、奈良教育大学及び奈良県特有のICT環境を理解するとともに、学習指導要領で学習の基盤としての資質・能力と位置付けられている「情報活用能力」と最先端のコンテンツを扱う力を育成するためのICT活用の具体例について、体験をとおして研究する。	
	STEAM教育演習	AIやIoTなどの科学技術の発達により社会が急速に変化している中、学校教育においては、STEAM教育によって、文系一理系、科学一芸術といった知の類型を超えて社会における課題を見つけ、解決できる資質・能力の育成が求められている。 本授業は、それを育む力をもった教員を育成するため、STEAM教育を主軸とする奈良女子大学工学部と本学におけるScience, Technology, Engineering, Arts, Mathematicsをそれぞれ専門とする研究者の共同により、STEAM教育の一例として科学と芸術を融合する演習（できるだけシンプルで簡単に日常の中で見つけた数理構造を音で表現するPBL）を行う。それにより、教師としての感性を磨くとともに、STEAM教育の知見と初等中等教育における実践知を得る。 サイエンス・情報処理・音楽について、それを専門としない初心者であっても楽しく学べる授業である。 (オムニバス/全15回) (93 宮下俊也/1回) 全15回のうち第1回目を担当し、STEAM教育の概論・音楽によるSTEAM教育をテーマとした授業を実施する。 (113 上村尚平/2回) 全15回のうち第2回目と第3回目を担当し、自然界の中にある音楽と音楽の中にある数理構造の発見について実例を交えた授業を実施する。 (116 安在絵美/2回) 全15回のうち第4回目と第5回目を担当し、音の計測と可視化について実例を交えた授業を実施する。 (114 大背戸豊/2回) 全15回のうち第6回目と第7回目を担当し、化学と音楽について実例を交えた授業を実施する。 (115 才脇直樹/2回) 全15回のうち第8回目と第9回目を担当し、音楽のためのインターフェース技術について実例を交えた授業を実施する。 (93 宮下俊也、113 上村尚平、114大背戸豊、115 才脇直樹、116 安在絵美/6回) (共同) 全15回のうち第10回目から第15回目を担当し、楽器やコンピュータ又は身近な生活用品を使った音楽制作演習・発表を行い、STEAM教育についてのまとめを行う。	オムニバス・共同（一部）
	授業力応用演習	STEAM教育、OECD Future of Education and Skills 2030、子供たち一人ひとりに個別最適化された創造性を育む教育など、令和時代のスタンダードとしての新たな視点での教育が求められている。世界的な潮流や教育理論について幅広く理解し、それらを学校教育で実現するための具体的な手立てとしての評価法や教育データの活用法など、教員としての資質向上を図り、新しい実践を生み出すための研究をおこなう。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
実践科目	演習科目	授業力基礎演習	授業づくり及び授業実践力の最も基本となる「学習指導要領の理解」「内容の理解」「教材開発」「単元計画・年間指導計画づくり」「児童生徒の実態に即した授業デザイン・授業展開」について演習を通して学ぶ。その上で、単元（題材）計画作成、本時展開案作成、指導細案作成、板書、評価計画、教材開発の実際を経験的に理解する。本演習では、課題探求実習や課題解決実習で授業実践を行う際に必要な授業づくりと授業実践の基本を習得するとともに、授業観察を通して実践の工夫を学びとる力や、実習先の児童生徒の実態に応じた授業を構想する基礎的な力を身に付けることを目標とする。第11～15回は、本科目の担当者以外の教員（各教科教育教員・教科専門教員）や学部生にも公開し、参加型で行う。	
		課題研究Ⅰ	1年次に開講し、ゼミナール形式で行う。ディプロマ・ポリシーに掲げた3点のうち、主として「1. 教育課題を探求し解決できる研究力と高度な実践力を有していること。」を目指し、教育学、教科内容（教科や教材開発に関わる専門等）、教科教育、教育実践（院生自身の実践を研究対象として行ったものでもよい）等に関わって、1年次に履修する各科目や「課題探求実習」を通じて取り組みたい研究テーマを決定し、研究の方法や結論の導き方、論文などによるまとめ方を指導する。また、1年次の学びの過程に即し、「養成する人材像」への達成状況や改善についても指導する。	
研究科目	研究科目	課題研究Ⅱ	2年次に開講し、ゼミナール形式で行う。ディプロマ・ポリシーに掲げた3点のうち、主として「1. 教育課題を探求し解決できる研究力と高度な実践力を有していること。」を目指し、1年次に定めた研究テーマについて、これまで履修した各科目や「課題解決実習」での検証を通して、研究成果をまとめる。さらに、その研究成果とともに2年間で身に付けた資質・能力を根拠をもって客観的に報告する「学位研究報告書」の作成・発表の方法についても指導する。	
		カリキュラム・マネジメント実践論	本授業は、学校が教育目標を達成するために行うカリキュラム・マネジメントについて、理論的な視点から学ぶとともに、事例研究を通じて、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの実践について理解を深める。本授業の目標は、以下のとおりである。 ①現代日本の学校におけるカリキュラム・マネジメントの意義や方法について説明することができる。 ②カリキュラム・マネジメントの視点から学校の現状や課題を分析し、学校改善の方向性を具体的に提案することができる。 (オムニバス方式/全15回) (5 赤沢早人/7回) 主担当として、第2～8回を担当する。理論的視点から各学校のカリキュラム・マネジメントの実際について講義するとともに、受講生による「事例校」分析のファシリテートを行う。 (75 山本敏久/5回) 副担当として、第9～13回を担当する。実践的視点から各学校のカリキュラム・マネジメントの実際について講義するとともに、受講生による「事例校」分析のファシリテートを行う。 (75 山本敏久、5 赤沢早人/3回)（共同） 第1回および第14、15回は、山本・赤沢が二人で担当する。第1回は、授業の目的や授業を通じた課題（パフォーマンス課題）について講義する。第14、15回は、各受講生による「事例校」分析の発表に関わるファシリテートを行う。	オムニバス・共同（一部）
専門科目	学校教育マネジメント科目	教師の成長と授業研究	本授業は、教師の発達課題、アセスメント、協働省察、同僚性、メンタリング、授業研究、教員評価などさまざまな事例を通して、教師が校内研究を通して成長する意味とその具体的実践を理解するための授業である。授業修了時に以下のことについて習得することを目的としている。 ①専門職としての教師に必要な能力と教師の成長の関係がわかる。 ②教師の成長と教員研修の関係がわかる。 ③同僚教師など他の教師の実践能力を向上させるための校内研修の方法がわかる。 ④同僚教師などを成長させる協働省察やメンタリングの方法がわかる。	
		地域とつくる学校	本授業は、学校を支える地域社会の人間形成力・教育力に関する現状と可能性をとらえた上で、学校及び教職員が地域社会と連携して、学校での学び・活動をつくりあげていく取り組みを考える。このテーマに関する実践史や理論史もとりあげるが、これらのみならず「地域とつくる学校」の具体事例を紹介しながら、鍵となるような主要なポイントを解説する。その際、児童・生徒の学び・活動に直接関わる営みに止まらず、安全見守り、保護者・地域住民と学校とのコミュニケーションのあり方も視野に入れる。 本授業は、前記したテーマにそくして、受講者が「地域とつくる学校」に関する理論の基礎及び実践に向けた視点・方法について考察できるようにすることを目的とする。	
		学級・学校づくりと特別活動	本授業は、学校づくりに生かす特別活動について、関連する理論と先行実践について理解を深め、具体的な特別活動の実践を計画、実施する力量を形成することを目指す。特別活動の目標、意義、内容および、各活動・学校行事の具体的な事例の検討から、自発的、自治的な活動を通じた学級づくり、学校づくりに生かす視点と方法を理解する。また、基盤となる人間関係づくりから自発的、自治的な特別活動の成立に向けた指導計画を作成する活動を通して、学校として特別活動を生かした児童生徒の育成に取り組む方法について考えを深めさせる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 学校教育マネジメント科目	学級経営実践論	本授業は、学級担任として必要な学級経営の実践的な指導力を形成することを目指す。そのために、学級集団の現状と課題、近年の児童生徒の実態に応じた学級集団育成のための方略を実践的に考察する。 具体的には、学級経営に関する実践的演習として、学校・学級の状況分析、学級経営案づくり、学級集団づくり、教師の指導力などをPBL【Project based Learning】（問題解決型学習）の手法を用いて行う。	
	学級集団づくりの実践分析研究	本授業では、教育実践現場で行われている学級集団づくりの活動を質的に分析する方法を学び、教育活動を分析的に捉える思考法を獲得するとともに、その分析的思考を学級集団づくり・学級経営・授業実践に活かす手立てを習得することを目指す。具体的には、年度初めの学級開きや、日常の授業・特別活動などでの、教師―児童生徒間で行われる教育実践を記録した質的データ（やりとりの映像データ、インタビューデータ、資料データ）の社会学的な分析方法を学ぶ。また、学修した分析的視点をういたケーススタディを行い、教育実践記録を読み解く演習や、学級での問題状況への対応方法についての検討をすることで、理論を実践に活かす方法を開発する。	
	ESDと総合的な学習の時間特講	本授業は、ESDと親和性の強い総合的な学習の時間における単元デザイン力を身に付けることを目的とする。ESDの見方・考え方、育てたいESDの資質・能力、価値観、また学習によって達成に貢献できるであろうSDGsを念頭に、意義のある総合的な学習の時間を実践できるようにする。そのために、実践事例に学びながら、ESDとSDGsの正しい理解とともに、各自が精選した題材をもとにしてゼロベースから学習指導案を作成できるようにする。	
	ESDカリキュラムマネジメント	本科目では、ESDカリキュラムに対する理解を深め、ESDカリキュラムマネジメント力の育成を図る。本科目前半ではまず、ESDの課題を検討し、ESDカリキュラムを開発するための視点と方法を学ぶ。次に、ESDカレンダーの意義と方法や、ESDにおける教師の役割、ESD実践の評価方法について学ぶ。その上で、ESDカリキュラムの（近接領域のカリキュラムを含めた）事例を検討する。本科目後半では、受講生による、幼稚園から高等学校までを対象としたESDカリキュラム事例の発表及び相互批評を行う。最後にこれまでの学修内容を振り返りまとめる。	
	ESDと地域創生	地域に立脚したESDを展開する能力を育む。地域の未来を構築していくにあたって重要なテーマを選び、地域調査を実施する。また、その成果を地域に関わる人々と共有し意見交換するべく、現地にてワークショップを開催する。そして、それらの成果を共同で論文にまとめる。なお、前期に開講する「SDGsフィールドワーク」との連続性をもたせるが、とりあげるテーマや地域は異なるため、本科目のみの受講も可能である。	
	SDGsフィールドワーク	SDGsを強く意識したテーマで、フィールドワークを中心とした地域調査を実施し、成果を共同で論文にまとめる。地域を歩き、景観を読み解き、地域に関わる多様な人々と接する。また、地域の課題や魅力を探究し、論理的に整理・考察する。それら一連のプロセスを通じて、地域調査・地域学習に必要なスキルの基礎を身に付けるとともに、SDGsの見方・考え方を教育者として育成・活用していくための能力を獲得する。	
	ESDと郷土教育・総合学習	本科目は、郷土教育・地域学習を軸にしながらかESDの視点を踏まえつつ、総合学習の理論を習得してよりよい授業づくり・カリキュラム開発ができるようになることを目的としている。カリキュラムにおける分化と統合、教科横断的な学習・探究的な学びに関する理解を深め、具体的事例に則しながら学習内容を創造する力について考える。前半はESD・郷土教育・総合学習の理念や歴史を整理し、後半は地域のフィールドワークや学校学級園での植物栽培などを事例に、子どもたちの身近にある具体的な事象を学習内容として掘り下げ、ESDの視点を活かした郷土教育・総合学習の実践方法を学ぶ。	
	学校教育の情報化特論	教育の情報化に関する教職必修科目「情報機器の操作」の発展的な内容を取り扱う。 学校内の「教育の情報化」を推進する役割として教員研修や児童生徒への情報活用能力育成の視点で各回の活動をもとに検討する。 (10 伊藤剛和) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (37 古田壮宏) 副担当として、授業の技術的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
	教育のためのデータサイエンス	学校現場における様々なICTの普及に伴い、教育現場には、学習支援システムや統合型校務支援システムなどにより、多様かつ大量のデータが蓄積されつつある。これらの有用性に着目し、データサイエンスの手法によりデータを分析し、その結果を読み取り解釈する活動を通して、データを活用するための分析に関する基礎を習得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学校教育マネジメント科目	体系的なプログラミング教育	小学校学習指導要領には、「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動」という記述がある。しかしながら具体的に小学校でどのような活動していくかは必ずしも定まっているとはいえません。この授業では、教育用プログラミング環境を実際に体験しながら、効果的なプログラミング教育とはを考えつつ、それを実践するためには教師にはどのような力が求められるかを追究することを目的とする。また、中学校・高等学校におけるプログラミングへの接続についても考える。 (37 古田壮宏) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (10 伊藤剛和) 副担当として、授業の実践的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
	授業支援ツールを活用した授業設計	各種授業支援ツールの機能・特性を理解しながら、授業設計での留意点などを検討しながら、学校全体で推進していく方法を考えていく。 (37 古田壮宏) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (10 伊藤剛和) 副担当として、授業の実践的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
専門科目	学校教育と心理学	本講義では、学校教育に関する心理学である「学校心理学」についての概要を把握するとともに、基礎知識の習得を目指す。また、チーム支援の実習も行う。具体的には、学校心理学が扱う内容や援助サービスの考え方、関連領域との関連などについて扱う。また、「学校心理士」の活動についても触れ、学校における教育実践的な問題に対応する際、心理学がどのように応用されるのかについて、学習面や進路面の双方から解説する。	
	子どもの「学び」と心理学	本授業の目的は、「学び」に関する心理学における基礎的知見を習得し、授業に実践する応用力を養うことである。学習、記憶、理解、認知、問題解決、動機づけなどのトピックについて、学校教育への応用という観点に着目しながら解説する。 具体的な到達目標は、①「学び」に関する心理学の様々な知見を知る／②学問的な知見を授業や学校教育に活用するための考え方がわかる、である。	
	教育と臨床	本講義では、個人の適応の捉え方や、その適応に資する態度要件について理解を深める。さらに、不登校やいじめ、非行や学力の問題を扱い、各臨床的事象に対して見立てと方針をどのように立てていくのかについて学ぶ。以上のことを通して、教育上の様々な問題について多様な観点から考察し、適切に対応していく力を養うことを目的とする。	
	子どもの発達の理解と支援	発達段階の理解と援助を理論的な考察及び実践を通して学ぶ。加えて、チーム学校時代においては、連携がキーワードとなるが、その具体的な方法である「コンサルテーション」、「コーディネーション」について学ぶ。こうした概念を学習し、援助が子どもに確実に届く方策を考える。授業の到達目標は以下のとおりである。 ①発達段階に応じた児童生徒の問題行動や援助ニーズについて理解ができる ②発達段階に応じた児童生徒を対象とした援助技法を理解し、基本的なカウンセリング技法を身につけている ③コンサルテーション、コーディネーション、チーム援助など学校心理学の鍵概念について理解している ④学校における援助サービスをデザインすることができる (オムニバス方式/15回) (131 水野治久/5回) 児童生徒の発達段階の理解、発達段階に応じた援助方法、教師に対するコンサルテーション、学校における援助サービス等の理論について、概説するとともに、実践事例を基に討議等を行う。 (133 四辻伸吾/10回) 援助技法、基本的なカウンセリング技法、コーディネーション、チーム援助について、概説するとともに、実践事例を基に討議等を行う。	オムニバス
	学校臨床の理論と実践	学校現場で起こる様々な問題に対するアプローチについて、臨床心理学的な視点で子どものこころの成長や変容を理解する方法を学習する。 以下のそれぞれの心理的援助の基礎理論を概観し、その実際を理解した上で教育臨床における個別支援の場面で、それぞれのアプローチがどのように適用されているのかを理解する。そしてさらにそれらの学校場面での発展的な実施や応用の可能性について検討する。	
	学級集団と心理学	本講義では、教室内の対人関係や学級集団の特徴、対人関係と学習活動との関連について理解を深める。さらに、今日問題となっている規範意識についても扱う。これらのトピックについて学ぶことを通して、教育上の様々な問題について多様な観点から考察し、適切に対応していく力を養うことを目的とする。 具体的な到達目標は、①教室内の対人関係や学級集団の特徴について理解する／②対人関係と学習活動との関連について理解する／③教室内の問題について心理学的な観点から理解する、の3点である。	
	教育支援と子どもの権利	教育や指導のあり方、ならびに子ども・若者の自立支援とキャリア形成を人権的視点からアプローチするため、世界人権宣言、国際人権規約や子どもの権利条約などとの関連で検討を加える。 授業の展開では、日本の同和教育の歴史、国連・ユネスコ、ヨーロッパ、ドイツなどの動向を考察しつつ、自立やキャリア形成と人権との関連、対話を踏まえた子どもの問題行動への対応、自尊感情を大切にす学級づくり・学校運営のあり方を検討しつつ論を展開する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 教育発達支援科目	学級集団のアクションリサーチ	学級内の対人関係や適応、対人関係と学習活動との関連などに関するデータを収集・分析し、これを多様な観点から考察するために必要な知識・技術を習得する。そして、学級における様々な問題に対して客観的に理解し、その解決策を教師自らが実証的に探索していく力を身に付ける。なお、本授業は、学位研究報告書の執筆に際して各自が行う資料（データ）収集と平行して履修することを想定している。 具体的な到達目標は、①学級内で発生する学業や対人関係に関連する問題の研究方法について理解する／②質問紙調査や実験等によってデータを収集・分析するための知識や技術を身に付ける／③得られたデータを基にして、自ら設定した問題の解決策を考察する力を養う、の3点である。	
	子どもの権利を踏まえた教育支援の実践	子ども・若者の人権と学習に着目し、自立支援（青少年育成と青少年福祉など）の理論と実践の動向を把握し、自立と人権、教育の関わりについて理解を深め、各人の研究テーマへと発展的に活用させることを目的とする。 授業では、『子ども・若者支援のパラダイムデザイン』の検討を踏まえ、子ども・若者支援の枠組みと多様性、学校との連携、課題と可能性について学ぶことにより、アイデンティティ、セルフ・エスティーム、理解と寛容、エンパワメント、居場所づくり、専門職の役割、支援システムなどについて理解を深めつつ、支援論、人権教育のあり方を検討する。	
	保育・幼児教育の内容論と実践の展開	保育・乳幼児教育は大きな変革期を迎えている。その重要性が世界的に認められ、日本においても幼児教育の無償化が行われ、量的拡充だけでなく、質の向上が強く求められている。本授業では、保育実践の質の向上として、保育内容の理解を深め、自らの実践を高めていく保育者の力量形成を目的とする。その際、①子どもをみるまなざし、すなわち子ども観の問い直しから始め、②保育内容を、乳児保育の3つの視点、5領域など、理論も含め、さまざまな観点から、具体的な実践事例を受講生で議論を重ねていくことで捉え直していく。これらを通して③自らの実践を振り返り、語り、評価し、明日への保育へと展開していく実践力の向上を目指す。保育の質の向上は、何を「質」と規定するかも、保育者自らの議論から始まる。具体的な事例をもとにした受講生間の議論を核に、授業を展開していく。	
	幼小連携・接続の理論と実践の展開	子どもの学びの連続性を確保するために、幼児期の教育と小学校以降の教育の滑らかな接続が求められている。本授業では、保育所、幼稚園、こども園等で行う幼児教育と小学校教育の連携・接続（以下、幼小連携・接続）について、まずその重要性を確認した上で、①歴史の変遷、現状を捉える。次に②要領・指針における連携・接続について、受講生の実践経験から具体的な事例を出し合い検討しながら理解を深め、③諸外国も視野に入れながら、先行事例について報告し合い議論する。さらに、それらを踏まえ、④実際に連携・接続を進めていく具体的方策について議論し、連携・接続を達成する力量形成を図る。幼小連携・接続の第一歩は、校園内、校園間の教職員との連携にある。授業においても、受講生間の活発な議論を通して、幼小連携・接続の重要性の理解を深め、具体的な実践を展望する力量形成をめざす。 (40 横山真貴子) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (35 廣瀬聡弥) 副担当として、授業の実践的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
	幼年教育の理論と実践	幼児教育・保育の基礎は、乳幼児の自発的な活動としての遊びを通して総合的な指導をすることである。本授業では、まず、豊かな教育・保育の実践力を身に付けるために、背景となる遊びを中心とした教育・保育の理論について学ぶ。次に、理論を踏まえた上で、ポストコロナ社会を考慮し、乳幼児の育ちや学びに立ち返り教育・保育を構想し検討する。授業では、幼児教育・保育の理論と実践を具体的に結びつけるために、学生同士のディスカッションを積極的に取り入れて展開する。 なお、本授業の目標は、乳幼児期の幼児教育・保育を理解し、子どもを取り巻く状況に応じて柔軟に教育・保育実践を構想する力を身に付けることである。	
	魅力ある幼稚園・保育所・こども園等の運営	園を運営(経営)する場合、重要な要素としてリーダーシップ、計画と運営、保育者等の管理、家庭との連携、地域との連携等がある。それらの要素を検討することによって、子どもや保護者、地域等において魅力ある園となる。そこで、リーダーやミドルリーダーとして園を運営することを想定し、園見学等を通して、子どもや保護者、地域等への説明責任をどのように果たしていくのかに関する実践力を身に付ける。そして、将来の自らの魅力的な園づくり構想に繋げる。 なお、本授業の目標は、園運営において重要な要素を理解し、魅力ある園づくりを構想し実践する力を身に付けることである。 (35 廣瀬聡弥) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (40 横山真貴子) 副担当として、授業の実践的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。	共同
	幼年心理の理論と保育	本授業では、乳幼児期から児童期までの子どもを対象に、主要な発達理論を最新の知見まで含めて学習し、発達段階にふさわしい保育・教育のあり方について議論を通して考察する。毎回の授業では、乳幼児期の発達に関する重要な概念を取り上げ、文献資料や映像資料からこれまでの研究知見の蓄積を概観する。その後、保育・教育実践における当該知見の活用や保育・教育上の課題について、事例の共有やそれに基づく討論を行い、保育・教育実践のあり方について考察する。 なお、本授業の目標は、乳幼児期の子どもの発達に関する重要な理論について理解し、幼年心理の理論の変化に応じて、柔軟に発達段階に応じた保育、教育実践のあり方を考える力を身に付けることである。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 教育発達支援科目	幼児理解を深めるための実践研究	幼児理解は、保育における全ての活動の基礎となる重要な要素であるが、実際に保育現場で子どもを理解し援助する際には、個々の保育者の視点や方法が用いられることとなる。そのため、事例研究を通して幼児理解を共有し、深めることが保育実践にとって重要である。本授業では、幼児の発達や学びの特徴を概観し、幼児理解の基盤となる知見を把握する。その上で、保育、教育現場における様々な事例をもとに、授業参加者の間で事例に対する考えを共有し、適切な援助とは何かについて議論を行う。 なお、本授業の目標は、幼児理解の基盤となる幼児の行動、思考の特徴を理解すること、そして、保育の中で自分の幼児理解を他者と共有し、他者の子どもの見取りから自身の幼児理解をより深める力を身に付けることである。	
	子ども家庭福祉の理論と実践	今日の保育・教育現場では、一人ひとりの子どもの育ちに加えて、育ちの基盤である家庭を支える実践が求められている。子育てで家庭を支えるためには、家庭内の状況だけではなく、現代社会のありよう・制度に加えて、その家庭が利用している資源も含む「生活全体」を視野に入れることが必要になる。すなわち子育てで家庭を支える実践のためには、「生活全体」を見る福祉の視点が求められる。そこで本授業では、保育・教育現場の専門職に求められる福祉の知識の修得を目指す。具体的には、①子どもの権利保障、子ども家庭福祉の理念、②子ども家庭福祉の実践（現場・領域）、③子ども家庭福祉における専門職、以上3点の理解を通して福祉の制度、サービス、専門職について理解する。最終的に、自身の実践を振り返り、福祉の視点を保育・教育現場で活かす重要性について考察できることを目指す。	
	子育て支援の理論と実践	子育てで家庭を“社会的”に支えるためには、その家庭内の状況に加え、「生活全体」を視野に入れること、専門職による支援が家庭に与える影響も踏まえて支援内容（介入）を検討することが求められる。すなわち「生活全体」を把握した上で支援を検討し、介入を行うという社会福祉による相談援助（ソーシャルワーク）の視点が求められる。本授業では、事例をもとに保育・教育現場の専門職に求められる福祉の視点、アプローチ法の修得を目指す。具体的には、①現代社会における子育て支援のあり方、②子育て支援における相談援助の方法、③特別な配慮を要する子どもと家庭の支援、以上3点の理解を通じて保育・教育現場の専門職に必要な福祉の視点やアプローチ法について理解する。最終的に、保育・教育現場で求められる子育て支援において福祉の視点を自身の実践に活かす方法を考察することを目的とする。	
	保育・幼児教育の質の確保と向上	現代の子どもをとりまく状況を整理し、そこから求められる保育・幼児教育の質を構造的に捉えることを目指す。現在、保育の質の議論は、評価と質保証という方向性で展開している。現代の子どもをとりまく状況と求められる保育の質について理解を深めた上で、諸外国における保育の質の確保と向上に関する仕組みと、保育の質に関する多様な評価方法について学ぶ。自らの保育をみる観点を振り返りながら、保育の質を捉えるための多様な方法を学び、それぞれのよさと課題について検討する。これらの内容を踏まえ、保育の質を高める方策について具体的な状況に基づいて提案していく。	隔年
	保育・幼児教育の質的研究	近年、質的研究の方法論が様々な学問分野で注目されるようになってきている。保育・幼児教育の分野でも、数量的データだけでなく、観察、実践記録、事例、エピソードなど、質的データを用いて研究する動きが出てきている。本授業では、保育・教育実践を理解する研究法と分析する理論を概観し、質的研究方法論の動向や理論的背景について学ぶ。可能な限り、実際にフィールドワークやインタビューに基づくデータ収集を行い、保育・教育実践を実践事例として記述する。同時に各事例が意図するところを質的見地から分析し、その構造を理解することを目指す。	隔年
	LD児・ADHD児の理解と支援	LDやADHDの基礎知識を学ぶとともに、その発達に影響を与える諸要因をおさえたうえで、具体的支援方法について学んでいく。また、LDやADHDが社会の構造の中でどのような困難を抱えているのかを、心理社会的側面から理解する。さらに、彼らの困難について、より具体的かつ身近なイメージを持つために、各自が関心をもったテーマについて、論文や資料をもとに発表し、発表をもとにグループディスカッションを行う（第11回～第14回）。	
	特別支援教育の生理・病理	特別支援教育で取り上げるべき各疾患や障害について原因、症状、特徴、心理、理解・対応の際の留意点などについて生理、病理等の医学的な視点（児童精神医学・小児神経医学）および脳科学的な視点から講義する。それにより、支援を必要としている児（病弱児）に応じた支援ができるようになる。	
	重度障害児の理解と支援	本講義では、肢体不自由児を中心とした重度障害児の教育について、学校教育で受け止めてきた歴史を踏まえつつ、子どもの発達と学習の支援のあり方についてアプローチする。重度障害児の発達過程を運動発達と情動・知的発達との関連でとらえつつ、脳性麻痺の早期発見や訓練、就学前リハビリテーション・療育、学齢期の重度障害児の教育の諸問題、特別支援学校における医療的ケアと生活の拡充、思春期・青年期の障害児特徴、重度障害児、重症心身障害児、卒業後の障害児・者のQOL（quality of life 生活の質）などについて述べる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	特別支援教育アセスメント事例研究	<p>アセスメントは「個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べる」といわれる。アセスメントは、児童生徒がどのように生活しているのか、周囲の人とどのように関わっているのかということを検討しつつ、児童生徒の障害の特性や障害があることによって生じている困難さ、周囲の人や環境を含めた生活を理解し、必要となる支援や将来の行動を予測することを可能とするものである。本講義では、重度障害児、発達障害児、学習障害児などのアセスメント事例を検討し、アセスメントの内容と方法を理解し、教育指導の組織化につなげることを課題とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (67 堀田千絵/3回)</p> <p>全15回のうち第1回、第7回および第15回を担当。アセスメントの総説と思春期青年期の知的障害の事例研究および教育実践への架橋について講ずる。 (23 全有耳/3回)</p> <p>全15回のうち第2回、9回および第11回を担当。医学的立場から障害の診断とアセスメントの関係の講ずるとともに、発達障害のうちLDの事例研究を担当する。 (73 富井奈菜実/3回)</p> <p>全15回のうち、第3回、第6回および第10回を担当。発達心理学の立場から心理検査とアセスメントの関係を講ずるとともに、幼児期・児童期の知的障害および発達障害のうちASDの事例研究を担当する。 (109 中西陽/4回)</p> <p>全15回のうち、第4回および第12回～14回を担当。発達心理学の立場から行動観察の方法について講ずるとともに、重複障害の事例研究を3回にわたって担当する。 (18 越野和之/2回)</p> <p>全15回のうち、第5回と第8回を担当。教育学の立場から教育実践とアセスメントの関係について講ずるとともに、成人期知的障害者の事例家旧を担当する。</p>	オムニバス
	特別支援教育コーディネーター論	<p>障害のある子どもの教育は、担当する複数の教師、職員、保護者、外部の専門家が連携し協力しながら、子どもの教育ニーズに応じて適切な教育を準備することが求められている。具体的には、次のような連携を構築する必要がある。たとえば、小・中学校の場合には、担任教師、特別支援教室の教師、学年の他学級の教師、またT Tや小グループの担当者、管理職の教師が。また保護者や登下校の付添担当者など保護者を支援する関係者がいる場合がある。さらに、就学前に在籍していた幼稚園や療育機関の担当者、医療機関の専門スタッフ、進学する学校の担当者などとの連携も必要である。また、特別支援学校において、特別支援学校の場合には、担任教師、学級の他の教師、学年の教師、進路指導部など関係する教師、保護者や保護者の支援者、交流先の小・中学校の教師、視覚障害を伴う場合には専門部門のある特別支援学校、入学進学前の学校の教師、就学前に在籍していた幼稚園や療育機関の担当者、医療機関の専門スタッフ、進学する学校の担当者などがあげられる。本講義では、特別支援教育コーディネーターの果たすべき役割について、事例をもとに検討を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (18 越野和之/3回)</p> <p>全15回のうち、第1回、第2回および第15回を担当。教育学の立場から、特別支援教育システムの成立と国内外のコーディネーター論および関係諸機関との連携について講ずる。 (67 堀田千絵/3回)</p> <p>全15回のうち、第3回、第4回および第14回を担当。教育法法学の立場から通常学校内のコーディネーターの役割や連携について講ずる。 (109 中西陽/4回)</p> <p>全15回のうち第5回～8回を担当。発達心理学の立場から特別支援学校でのコーディネーターの役割や連携について講ずる。 (23 全有耳/3回)</p> <p>全15回のうち第9回～11回を担当。障害児児医学の立場から、特に発達障害の児童生徒に関わる学校内の取り組みとコーディネーターの役割について講ずる。 (73 富井奈菜実/2回)</p> <p>全15回のうち第12回、第13回を担当。発達心理学の立場から、通常の小中学校内の特別支援学級および通級指導教室とコーディネーターの業務との関係について講ずる。</p>	オムニバス
	特別支援教育のシステム論	<p>この授業では、わが国における従来の障害児教育制度である「特殊教育」制度と対比しつつ、新たな障害児教育制度構想としての「特別支援教育」について多面的に把握する。とりわけ、「一人一人のニーズを把握し必要な支援を提供する」という基本的な発想とその具体化のためのシステムについて理解するとともに、インクルーシブ教育システム構築にむけた課題を論じる。</p>	
	特別支援教育の心理学	<p>特別支援を必要とする子どもたちの心理発達の変化を年齢を追って考察するとともに、各ライフステージで起こり得る問題を提示し、学校でできる工夫や配慮について考える。</p> <p>知的障害、自閉スペクトラム症 (ASD)、注意欠如・多動症 (ADHD)、局限性学習症 (LD) 等、発達に偏りを持つ児童生徒の各発達段階における心理面のリスクや学業面での困難を正しく理解し、どのような配慮が可能か、教室でできる工夫や対応についてを考えるとすることを目標とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教育発達支援科目	自閉症児の理解と支援	<p>自閉症は発達障害の一つであり、近年多くのトピックで取り上げられるようになったが、その本態の理解は依然論争的な課題である。この講義では、自閉症について国際的に共有されている定義および診断基準について概説した上で、その障害の本態などについての論点についても紹介する。それらを踏まえて、自閉症のある子どもの発達の特徴を述べ、自閉症児者ならびにその家族への支援の課題について、ライフステージごとに検討を加える。</p>	
専門科目 教科教育科目	ESDとしての教育実践 (言語・社会科学領域)	<p>本学出版のテキスト『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践－現職教員と学生のために－』を用い、その第5章「学校における実践事例」の執筆者（附属学校教員）によって各教科等におけるESDの実践事例を解説する。それを受け、言語・社会科学領域の教科等教育を学ぶ院生は、自分が専門とする教科等と関連付けて互いに議論し、教科横断的にESDについて知識と実践力を身に付ける。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (95 中村基一／2回) 全15回のうち第1回、第2回を担当し、ESDとしての社会科教育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。 (95 中村基一、83 廣岡敏美／1回) (共同) 全15回のうち第3回を担当し、ESDとして、社会科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。 (96 入澤佳菜／2回) 全15回のうち第4回、第5回を担当し、ESDとしての小学校外国語教育について、附属小学校における実践例を元に講義を行う。 (96 入澤佳菜、83 廣岡敏美／1回) (共同) 全15回のうち第6回を担当し、ESDとして、小学校外国語と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。 (97 奥原牧／2回) 全15回のうち第7回、第8回を担当し、ESDとしての英語教育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。 (97 奥原牧、83 廣岡敏美／1回) (共同) 全15回のうち第9回を担当し、ESDとして、英語教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。 (98 若森達哉／2回) 全15回のうち第10回、第11回を担当し、ESDとしての道徳について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。 (98 若森達哉、83 廣岡敏美／1回) (共同) 全15回のうち第12回を担当し、ESDとして、道徳教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。 (99 市橋由彬／2回) 全15回のうち第13回、第14回を担当し、ESDとしての「総合的な学習の時間」について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。 (99 市橋由彬、83 廣岡敏美／1回) (共同) 全15回のうち第15回を担当し、ESDとして、「総合的な学習の時間」の実践について討論し、実践的知見を得させる。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 教科教育科目	ESDとしての教育実践 (理数・生活科学領域)	<p>             本学出版のテキスト『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践－現職教員と学生のために－』を用い、その第5章「学校における実践事例」の執筆者（附属学校教員）によって各教科等におけるESDの実践事例を解説する。それを受け、理数・生活科学領域の教科等教育を学ぶ院生は、自分が専門とする教科等と関連付けて互いに議論し、教科横断的にESDについて知識と実践力を身に付ける。              (オムニバス方式/全15回)              (111 竹村景生/2回)              全15回のうち第1回、第2回を担当し、ESDとしての数学科教育について、附属中学校における実践経験を元に講義を行う。              (111 竹村景生、81 阪部清/1回) (共同)              全15回のうち第3回を担当し、ESDとして、数学科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (100 佐竹靖/2回)              全15回のうち第4回、第5回を担当し、ESDとしての理科教育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。              (100 佐竹靖、81 阪部清/1回) (共同)              全15回のうち第6回を担当し、ESDとして、理科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (112 中澤哲也/2回)              全15回のうち第7回、第8回を担当し、ESDとしての生活科教育の実践について、小学校における実践例を元に講義を行う。              (112 中澤哲也、81 阪部清/1回) (共同)              全15回のうち第9回を担当し、ESDとして、生活科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (101 葉山泰三/2回)              全15回のうち第10回、第11回を担当し、ESDとしての技術科教育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。              (101 葉山泰三、81 阪部清/1回) (共同)              全15回のうち第12回を担当し、ESDとして、技術科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (102 中嶋たや/2回)              全15回のうち第13回、第14回を担当し、ESDとしての家庭科教育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。              (102 中嶋たや、81 阪部清/1回) (共同)              全15回のうち第15回を担当し、ESDとして、家庭科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。           </p>	オムニバス・共同 (一部)
	ESDとしての教育実践 (芸術・保健体育領域)	<p>             本学出版のテキスト『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践－現職教員と学生のために－』を用い、その第5章「学校における実践事例」の執筆者（附属学校教員）によって各教科等におけるESDの実践事例を解説する。それを受け、芸術・保健体育領域の教科等教育を学ぶ院生は、自分が専門とする教科等と関連付けて互いに議論し、教科横断的にESDについて知識と実践力を身に付ける。              (オムニバス方式/全15回)              (25 竹内晋平/1回)              全15回のうち第1回を担当し、ESDとしての芸術教育について、学習指導要領等々の関連について講義を行う。              (103 挽地夕姫/2回)              全15回のうち第2回、第3回を担当し、ESDとしての音楽科教育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。              (103 挽地夕姫、25 竹内晋平/1回) (共同)              全15回のうち第4回を担当し、ESDとして、音楽科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (104 長友紀子/2回)              全15回のうち第5回、第6回を担当し、ESDとしての美術科教育の実践について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。              (104 長友紀子、25 竹内晋平/1回) (共同)              全15回のうち第7回を担当し、ESDとして、美術(図工)科教育と他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (105 井上寛崇/2回)              全15回のうち第8回、第9回を担当し、ESDとしての小学校体育について、附属小学校における実践例を元に講義を行う。              (105 井上寛崇、25 竹内晋平/1回) (共同)              全15回のうち第10回を担当し、小学校体育と小学校他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (106 佐藤朗/2回)              全15回のうち第11回、第12回を担当し、ESDとしての中学校保健体育について、附属中学校における実践例を元に講義を行う。              (106 佐藤朗、25 竹内晋平/1回) (共同)              全15回のうち第13回を担当し、中学校保健体育と中学校他教科とを横断する実践について討論し、実践的知見を得させる。              (25 竹内晋平、93 宮下俊也/2回) (共同)              全15回のうち第14回、第15回を担当し、ESDとしての表現力育成について講義と演習を行い、「表現すること」を軸に、芸術教科と他教科とを横断する実践について知見を得させる。           </p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 教科教育科目	教科の原理と授業づくり (国語)	<p>本授業は学制発布以来継続されてきた国語教育の不易な側面と、時代の要請に応じて創造されてきた流行的な側面を精査・検討することを通し、国語教育の原理を帰納的に解明する。また、国語科においては教科の基礎基盤的な位置づけにある「言語的な知識」の上に、思考力などの諸能力を育成するための各領域の教材が位置する。本授業では両者の関係性について考究するとともに、教材の読み方について各分野の先端の学問知見を背景に考察する。さらに学習素材としての教材をどのように研究し、授業づくりにどのように展開するか、目標論、学習者論、授業過程論、評価論等の観点からや受講者同士の討議や発表を通して深めていく。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (27 棚橋尚子/11回) 全授業15回のうち第1～9回及び第14、15回を担当し、国語科教育の歴史と実態及び授業づくりについての授業を実施する。 (34 日高佳紀/2回) 全授業15回のうち第10、11回を担当し、現代文教材の読み方についての授業を実施する。国語科教育の歴史と実態及び授業づくりについての授業を実施する。 (45 有馬義貴/2回) 全授業15回のうち12、13回を担当し、古典教材の読み方についての授業を実施する。</p>	オムニバス
	ICTを含む授業実践 (国語)	<p>本授業においては、国語科の各領域における授業について受講者が授業実践を行うことを通して、考察を深めることを目的とする。人工知能 (AI) や IoT の広がり大きく変わる社会の中で、国語科の授業もその流れに対応するものに変化を遂げていく必要がある。本授業では、初等・中等学校における授業を見学することを通し、社会の要請にこたえることができる「ICT活用を重視した授業」について課題を見つけるとともに知見を学ぶ。さらに、その考究に基づいた学習指導案を作成し、デジタル教材の工夫を施す。そのうえで実際に模擬授業とその検討とを行い、教育の場に生きる国語科の授業について実践力を高めていく。模擬授業については、受講者自身で編集し、テロップ等を加えながら「国語科授業ガイド」を作成する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (27 棚橋尚子/6回) 全授業15回のうち、第2～4回、9回及び15回を担当し、ICT活用を含む国語科授業実践のあり方と検討および模擬授業の指導についての授業を実施する。 (45 有馬義貴、27 棚橋尚子/2回) (共同) 全授業15回のうち、第5、6回を担当し、国語科実践検討と模擬授業の指導についての授業を実施する。 (34 日高佳紀、27 棚橋尚子/2回) (共同) 全授業15回のうち、第7、8回を担当し、国語科実践検討と模擬授業の指導についての授業を実施する。 (45 有馬義貴、27 棚橋尚子、34 日高佳紀/5回) (共同) 全授業15回のうち、第10～14回を担当し、模擬授業の指導についての授業を実施する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科内容と教材開発 (古典文学) I	<p>本科目は、古典文学 (漢文を含む) に関する研究能力を身に付けることにより、教科内容に関する専門的知識・能力の向上を図るものである。授業は受講者による発表・討議を中心とする。序盤～中盤の回では、各回のテーマ (本文・作者・語り手・引用・話型・歌ことば・享受、等々) にそった分析を通して、古典文学作品に対する理解を深めつつ、研究の視点・方法について考察・検討していく。そこで得られた知見をいかし、終盤の回では、学校教育全体の中で古典教育 (古典学習) が担いよう役割を見定めつつ、新たな単元・教材 (学習材) の開発を試みる。なお、取り上げる作品については、受講者の専門領域、興味関心などに応じて決定する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (45 有馬義貴、27 棚橋尚子/1回) (共同) 全授業15回のうち、第1回を担当し、古典教育の歴史や現状についての授業を実施する。 (45 有馬義貴/10回) 全授業15回のうち、第2～9回及び第12、13回を担当し、古文教材の分析および開発研究についての授業を実施する。 (85 橋本昭典/2回) 全授業15回のうち、第10、11回を担当し、漢文教材の分析についての授業を実施する。 (45 有馬義貴、85 橋本昭典/1回) (共同) 全授業15回のうち、第14回を担当し、漢文教材および古文・漢文融合教材の開発研究についての授業を実施する。 (45 有馬義貴、85 橋本昭典、27 棚橋尚子/1回) (共同) 全授業15回のうち、第15回を担当し、古典教育の展望についての授業を実施する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科内容と教材開発 (古典文学) II	<p>本科目は、教科内容に関する高度な専門的知識・能力を有する人材の育成を図り、古典文学に関する研究能力の向上を促すものである。授業は、受講者による発表・討議を中心とする。前半の回では、複数の論文・注釈書 (古注釈を含む) 等を参照し、先行研究の成果を相対化しながら、古典文学作品について分析・考察していく (輪読形式)。そこで得られた知見をいかし、後半の回では、受講者が各自で選択した作品やテーマに関する研究発表、あるいは新たな単元・教材 (学習材) の開発をおこなう。なお、前半の輪読で取り上げる作品については、受講者の専門領域、興味関心などに応じて決定する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (45 有馬義貴、27 棚橋尚子/2回) (共同) 全授業15回のうち、第1、15回を担当し、古典教育の意義・目的や指導・学習方法についての授業を実施する。 (45 有馬義貴/13回) 全授業15回のうち、第2～14回を担当し、古典教材の分析および開発研究についての授業を実施する。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	教 科 教 育 科 目	教科内容と教材開発 (近代文学) I	<p>本科目は、近代文学教材を読み解くための文学理論を身に付けることにより、教科内容に関する専門的知識・能力の向上を図るものである。授業は受講者による発表・討議を中心とする。序盤～中盤には、各回のテーマ（言語論・物語論・コミュニケーション理論・読者論・フィクション論・その他）の概容を捉えるとともに、各回の理論を応用した分析方法を用いて文学作品にアプローチする実践を通して、専門知識を教材研究に接続する方法を考察する。そこで得られた知見をいかし、終盤では、具体的な文学作品を教材化するために必要な要素をふまえながら、新たな単元・教材（学習材）の開発を試みる。なお、取り上げる作品については、受講者の専門領域、興味関心などに応じて決定する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）            (34 日高佳紀、27 棚橋尚子／2回)（共同）            全授業15回のうち、第1、15回を担当し、「文学理論と教材研究の関係（導入）」および「文学教育の展望（総括）」についての授業を実施する。            (34 日高佳紀／13回)            全授業15回のうち、第2～14回を担当し、「文学理論を用いた教材研究」・「教材研究のための文学理論」についての授業を実施する。</p>	オムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発 (近代文学) II	<p>本科目は、教科内容に関する高度な専門的知識・能力を有する人材の育成を図るとともに、近現代文学に関する研究能力の向上を促すものである。授業は、受講者による発表・討議を中心とする。序盤から中盤にかけては、具体的な文学作品について詳細な注釈をつけて輪読し、作品細部の意味（時代背景など）と作品全体における機能をふまえながら「解釈」につなげていくことを目指す。そこで得られた方法論をいかし、終盤には、受講者が各自で選択した作品やテーマに即した新たな単元・教材（学習材）の開発をおこなう。なお、輪読で取り上げる作品については、受講者の専門領域、興味関心などに応じて決定する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）            (34 日高佳紀、27 棚橋尚子／2回)（共同）            全授業15回のうち、第1、15回を担当し、「文学作品の注釈と教材研究の関係（導入）」および「文学教育の新たな教材によるモデル授業」についての授業を実施する。            (34 日高佳紀／13回)            全授業15回のうち、第2～14回を担当し、「近現代文学作品の注釈と解釈」および「新たな教材開発」についての授業を実施する。</p>	オムニバス・共同（一部）
		教科内容と教材開発 (語彙・文法)	<p>本授業では、学習指導要領で重視されている語彙および、指導が画一的になりがちな文法について考察を深め、教材の開発を行う。語彙では、「形態素解析」「頻度と統計分析」「見出し語の認定」「テキストマイニング」の側面について理解を深め、学校教育に資する教材づくりにつなげることを目的とする。まず、上記の手法を活用しながらテキストの語彙的特徴から、語彙教育の方法と課題について考察する。文法では、学校文法研究の中からテーマを取りあげ、理解を深める。特にコーパス解析に基づく文法と語彙との関係について考察し、学校教育につなげていくことを目指す。ヴォイス、テンス、アスペクト、モダリティなどの文法的カテゴリと構文論について学び、文法教育の諸問題について整理し、教材の開発につなげる。</p>	
		教科内容と教材開発 (音声言語)	<p>本授業では国語科授業の重要な位置を占める音声言語の指導について、音声学や音韻論の専門知識を背景に指導法や教材を開発することを目的とする。学習指導要領において音声言語の重視が言われて久しいが、瞬時に消えていく音声言語の指導はその性質上難しく、学校現場においても十分に目標を達成できているとはいえない。本授業では、ディベートやパネルディスカッション、朗読など実際の音声言語活動を体験することを通して、学校現場における音声言語教育の振り返りを行い、あらたな指導法へとつなげていく。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）            (27 棚橋尚子／11回)            全授業15回のうち、第1、4～13回を担当し、音声言語の実践と教材開発についての授業を実施する。            (86 前田広幸／2回)            全授業15回のうち、第2、3回を担当し、音韻論など授業の背景となる専門領域の講義と教材開発検討についての授業を実施する。            (27 棚橋尚子、86 前田広幸／2回)（共同）            全授業15回のうち、第14、15回を担当し、開発教材の交流についての授業を実施する。</p>	オムニバス・共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	教科の原理と授業づくり (社会)	<p>本科目ではまず、教科専門教員より、教科内容学の立場から「社会科への期待」についての講話を受ける。次に、教科教育教員より、社会科教育の理論や実践についての講義を受け、社会科授業力向上の基盤をつくり、社会科教育に対する理解を深める。その上で、社会科教育研究の方法についての講義を受け、自らが関心をもつ研究内容の最新動向を知る。最後に、本科目全体の内容を振り返り、学修内容をまとめる。 (オムニバス方式/全15回) (48 太田満/13回)</p> <p>授業全15回のうち第1回、第4～15回を担当し、社会科の思想的・歴史的基盤、方法原理、学力と評価、授業づくりの理論、学習指導要領の分析、評価の高い社会科授業実践の検討、社会科教育研究の方法と最新動向をテーマとした授業を実施する。 (19 今正秀、32 西田慎/1回) (共同)</p> <p>授業全15回のうち第2回を担当し、歴史・地理分野における教科内容研究と授業づくりをテーマとした授業を実施する。 (43 渡邊伸一、51 梶尾悠史/1回) (共同)</p> <p>授業全15回のうち第3回を担当し、公民分野における教科内容研究と授業づくりをテーマとした授業を実施する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	ICTを含む授業実践 (社会)	<p>「教科の原理と授業づくり (社会)」での学びをもとに、実際に社会、地歴・公民の授業を構想し、実践できる力を身に付ける。その指導案は、社会的見方と考え方に裏付けられたものでなくてはならない。そして、立案した学習指導案に基づき、授業実践の力量を模擬授業等によって身に付ける。 なお、全15回のうち5回はICT機器を用いた実践について学び、その力量を身に付ける。 (オムニバス方式/全15回) (48 太田満/3回)</p> <p>授業全15回のうち第1回、第2回と第15回を担当し、社会科と地歴・公民教育の原理とICT授業をテーマとした授業を実施する。 (50 奥田喜道/4回)</p> <p>授業全15回のうち第3～6回を担当し、社会科と地歴・公民科における情報教育の原理をテーマとした授業を実施する。 (33 根田克彦/4回)</p> <p>授業全15回のうち第7～10回を担当し、社会科と地歴・公民科におけるICT授業の実践と立案をテーマとした授業を実施する。 (108 森伸宏/4回)</p> <p>授業全15回のうち第11～14回を担当し、社会科と地歴・公民科におけるICT授業の模擬授業とその批評をテーマとした授業を実施する。</p>	オムニバス
	教科内容と教材開発 (社会・地理歴史 I)	<p>小学校社会科、中学校社会科地理的分野・歴史的分野、及び高等学校地理歴史の教科書記述に反映された教科内容の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに、院生自らが高度な教材開発を行うためのより深い教科内容理解とその探究を行うことができることをめざす。 (オムニバス/全15回) (19 今正秀、32 西田慎、33 根田克彦、54 河本大地/3回) (共同)</p> <p>授業全15回のうち第1回、第14～15回を担当し、ガイダンス及び院生による教科内容探求の発表と検討を行う。 (19 今正秀/3回)</p> <p>授業全15回のうち第2～4回を担当し、教材開発のための教科内容研究 (日本史) をテーマとした授業を実施する。 (32 西田慎/3回)</p> <p>授業全15回のうち第5～7回を担当し、教材開発のための教科内容研究 (世界史) をテーマとした授業を実施する。 (54 河本大地/3回)</p> <p>授業全15回のうち第8～10回を担当し、教材開発のための教科内容研究 (系統地理) をテーマとした授業を実施する。 (33 根田克彦/3回)</p> <p>授業全15回のうち第11～13回を担当し、教材開発のための教科内容研究 (地誌) をテーマとした授業を実施する。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 教科教育科目	教科内容と教材開発 (社会・地理歴史Ⅱ)	小学校社会科、中学校社会科地理的分野・歴史的分野、及び高等学校地理歴史各教科を構成する専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに、院生自らが教材開発及び教育実践を行うことができることをめざす。 (オムニバス/全15回) (33 根田克彦、54 河本大地、32 西田慎、19 今正秀/3回) (共同) 授業全15回のうち第1回、第14～15回を担当し、ガイダンス及び院生による開発教材の考察を行う。 (33 根田克彦/3回) 授業全15回のうち第2～4回を担当し、地理教材の開発(地誌)をテーマとした授業を実施する。 (54 河本大地/3回) 授業全15回のうち第5～7回を担当し、地理教材の開発(系統地理)をテーマとした授業を実施する。 (19 今正秀/3回) 授業全15回のうち第8～10回を担当し、歴史教材の開発(日本史)をテーマとした授業を実施する。 (32 西田慎/3回) 授業全15回のうち第11～13回を担当し、歴史教材の開発(世界史)をテーマとした授業を実施する。	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発 (社会・公民Ⅰ)	小学校社会科、中学校社会科公民的分野、及び高等学校公民の教科書記述に反映された教科内容の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに、院生自らが高度な教材開発を行うためのより深い教科内容理解とその探究を行うことができることをめざす。 (オムニバス/全15回) (51 梶尾悠史、50 奥田喜道、108 森伸宏、43 渡邊伸一/3回) (共同) 授業全15回のうち第1回、第14～15回を担当し、ガイダンス及び院生による教科内容探究の発表と検討を行う。 (51 梶尾悠史/3回) 授業全15回のうち第2～4回を担当し、教材開発のための教科内容研究(倫理)をテーマとした授業を実施する。 (50 奥田喜道/3回) 授業全15回のうち第5～7回を担当し、教材開発のための教科内容研究(政治経済)をテーマとした授業を実施する。 (108 森伸宏/3回) 授業全15回のうち第8～10回を担当し、教材開発のための教科内容研究(政治経済)をテーマとした授業を実施する。 (43 渡邊伸一/3回) 授業全15回のうち第8～10回を担当し、教材開発のための教科内容研究(公共)をテーマとした授業を実施する。	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発 (社会・公民Ⅱ)	小学校社会科、中学校社会科公民的分野、及び高等学校公民各教科を構成する専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに、院生自らが教材開発及び教育実践を行うことができることをめざす。 (オムニバス/全15回) (43 渡邊伸一、108 森伸宏、50 奥田喜道、51 梶尾悠史/3回) (共同) 授業全15回のうち第1回、第14～15回を担当し、ガイダンス及び院生による開発教材の考察を行う。 (43 渡邊伸一/3回) 授業全15回のうち第2～4回を担当し、公共教材の開発をテーマとした授業を実施する。 (108 森伸宏/3回) 授業全15回のうち第5～7回を担当し、政治経済教材の開発をテーマとした授業を実施する。 (50 奥田喜道/3回) 授業全15回のうち第8～10回を担当し、政治経済教材の開発をテーマとした授業を実施する。 (51 梶尾悠史/3回) 授業全15回のうち第11～13回を担当し、倫理教材の開発をテーマとした授業を実施する。	オムニバス・共同(一部)
	教科の原理と授業づくり(英語)	英語教師として極めて重要である外国語学習、第2言語習得の理論を理解・学習し、代表的な教授法を学びながら、それに基づき、模擬授業を行う。また、英語の文献を読み、さらに英語での発表や意見交換を通じて英語力の向上も目指していく。本授業の到達目標を以下の3点とする。 ①中学校英語に用いることができる主要な外国語教授法について簡単に説明することができる。 ②主要な外国語教授法に基づく授業設計、模擬授業ができる。 ③ほぼ英語での授業を実施できる。 ※授業は基本的に英語で行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	教科内容と教材開発 (テキストをスピーキングに活かす)	<p>教職大学院におけるテキストの学修は、(i)テキストの精緻な分析方法を学ぶこと、(ii)そうした分析方法を中学校・高等学校の英語指導に活かす方法を学ぶことの2要素を含む。「教科内容と教材開発(テキストをスピーキングに活かす)」はテキスト分析と英語指導に関わる基礎的能力の習得を目指す。その観点から、中学校・高等学校の教科書に掲載された文学作品を含むテキストを選び、基本的に分析批評を行うが、分析批評で得られた「読み」がテキストの背景にある歴史的・文化的事情にどう結びついているのかについても学修する。英語指導の実際面としては、通訳技能開発の手法を利用し、テキスト分析で得られた意味や自己の読みを「話す」活動を促進させる。また、通訳技能開発の手法を発展させ、奈良の文化的特性を活かし、中学生・高校生の英語ガイド活動を指導するノウハウも習得させる。併せて、教材を自ら選び出し、学習者の実態に応じた教材作成及び評価ができる力も育成する。</p> <p>(オムニバス/15回) (16 門田守/14回)</p> <p>第1回～第14回は、門田が科目の概要に沿って、下記の各授業回の内容のとおり担当する。 (16 門田守、21 佐藤臨太郎、72 米倉陽子、44 アムンルド・トーマス・マーティン/1回)(共同)</p> <p>第15回は、門田が学生に模擬授業等を行わせ、上記3名の教員と共に評価する。</p>	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発 (テキストをライティングに活かす)	<p>教職大学院におけるテキストの学修は、(i)テキストの精緻な分析方法を学ぶこと、(ii)そうした分析方法を中学校・高等学校の英語指導に活かす方法を学ぶことの2要素を含む。「教科内容と教材開発(テキストをライティングに活かす)」はテキスト分析と英語指導に関わる応用的能力の習得を目指す。その観点から、高等学校の教科書に掲載された文学作品を含むテキスト、児童文学、及びイギリスの現代短編小説から題材を選び、基本的に分析批評を行うが、分析批評で得られた「読み」がテキストの背景にある歴史的・文化的事情にどう結びついているのかについても学修する。英語指導の実際面としては、テキスト分析で得られた意味や自己の読み方を議論した上で、「書く」活動を通じて、相手に正確、かつ効果的に自己の「読み」を表現する方法を学ぶ。併せて、教材を自ら選び出し、学習者の実態に応じた教材作成及び評価ができる力も育成する。</p> <p>(オムニバス/15回) (16 門田守/14回)</p> <p>第1回～第14回は、門田が科目の概要に沿って、下記の各授業回の内容のとおり担当する。 (16 門田守、21 佐藤臨太郎、72 米倉陽子、44 アムンルド・トーマス・マーティン/1回)(共同)</p> <p>第15回は、門田が学生に模擬授業等を行わせ、上記3名の教員と共に評価する。</p>	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発 (英文法指導)	<p>教職大学院における英語学の学修は、 (i)英語使用の現場で英文法の知識を活かすための知識の習得 (ii)その知識を中学校・高等学校の英語指導へ還元させる方法の習得の2要素を含む。「教科内容と教材開発(英文法指導)」では、上記の2要素を意識して授業を進める。優れた英語教員となるには、ターゲットとなる外国語の背景にある認知の仕方・社会性・文化継承という観点から文法を学ぶ必要がある。これはESDで育みたい力としてあげられている「体系的な思考力」の養成にも直結する。</p> <p>英文法指導の実際面の要諦は、それぞれに異なる言語文化背景を持つ他者との協働において、自分の考えや思いを英語で表現する手段を理解させることにある。本授業では、講義と豊富なライティング演習を通して、英語話者が持つ英語のモノの見方を学習し、教育の現場に活かす方法を考える。</p> <p>(オムニバス/15回) (72 米倉陽子/14回)</p> <p>主担当として14回とも講義・演習を担当する。 (72 米倉陽子、21 佐藤臨太郎、16 門田守、44 アムンルド・トーマス・マーティン/1回)(共同)</p> <p>院生のまとめのプレゼンの際にコメンテーターとして指導し、総括を行う。</p>	オムニバス・共同(一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	教科教育科目	Organizing your classroom talk and assignments effectively	<p>(英文) Teachers often wonder how they can improve their classroom talk and the structure of the work they do with students. But how to do this? Teaching and research worldwide shows the potential of genre thinking to transform teaching. But what is genre thinking, and how can teachers in Japanese English education use it? In this course, you will learn about genres, which are the staged, social, goal-oriented ways that we do things in society with language, and how we can use genres consciously and explicitly to improve what we teach and how we teach.</p> <p>(和訳) 教師が授業において、どのように効果的な英語での発話をすべきか、生徒とのやり取りをどのように構成すべきかという大きな課題である。これまでの研究・実践では、ジャンル思考が この課題を解決する大きな可能性があることを示している。それでは、このジャンル思考とは何か、また、日本の英語教育においてどのように有効活用できるのか。この授業では 社会での言語使用における段階的、社会的、目標志向的な方法であるジャンルについて学び、授業内容、授業法を向上させるために、それをどのように活用できるかを学ぶ。授業は英語で行う。受講者の使用言語も基本的に英語で行う。受講者には最低でも英検2級程度の英語力が求められる。</p>	
		教科の原理と授業づくり (小学校外国語)	<p>小学校の学級担任として外国語活動や外国語科の指導に必要な実践的知識・技能の習得を目指す。授業では、小学校外国語教育のねらいとともに、指導の基礎となる第二言語習得理論や外国語教授法等の理解を図る。その後、指導者の目標言語使用、4技能の指導と評価、発達段階に応じた指導、ALTとの連携、校内研修等について、これまでの知見から実践への示唆を導き出し、実践事例を考案・検討する。本科目では、学部卒院生、現職教員院生ともに、具体的に以下の資質能力を育成する。</p> <p>(1) 小学校の学級担任として外国語教育の指導に必要な知識を理解している。  (2) 小学校の学級担任として外国語教育の指導に必要な実践的スキルを習得している。  (3) 外国語教育の実践に関わって必要な連携・協働ができる。</p> <p>※小学校教員志望院生及び小学校現職教員院生は本科目を履修することが望ましい。</p>	
		ICTを含む授業実践 (小学校外国語・英語)	<p>外国語教育においてICTを効果的に活用しながら授業実践する力の高度化を図る。授業では、奈良県の小学校外国語専科教員や中学校英語教員、ALTとのオンライン・オフラインによる協働により、ICTを活用した実践事例を検討するとともに、小学校・中学校における授業改善のためのアクション・リサーチを実施する。本科目では、具体的に以下の資質能力を育成する。</p> <p>&lt;全院生&gt;  (1) 外国語教育実践に関わって、効果的にICTを活用することができる。  (2) 外国語教育に関わる自らの実践を計画・実施・評価・改善することができる。</p> <p>&lt;学部卒院生&gt;  (3) 外国語教育に関わって他の教員と協働して授業改善を進めることができる。</p> <p>&lt;現職教員院生&gt;  (3) 外国語教育に関わって校内や地域の研究・研修の中心的役割を果たすことができる。  (オムニバス方式/全15回)  (74 前田康二/7回)</p> <p>各受講院生の目標設定及び自己評価支援、指導計画・学習指導案の作成指導、現職教員との協働による事例研究のファシリテーションを行う。  (74 前田康二、21 佐藤臨太郎/8回) (共同)</p> <p>外国語教育の実践とICT活用についての講義及び院生の議論のファシリテーション、授業改善の方策についての講義と実践指導を行う。</p>	オムニバス・共同 (一部)
		教科内容と教材開発 (小学校外国語)	<p>本授業では、日本の小学校外国語教育の背景教育領域となりうる国際理解教育および複言語・言語意識教育に関する理論と実践を学ぶことにより、具体的に次のような資質能力を育成する。</p> <p>(1) 国際理解教育および複言語・複文化教育に関わる理念・概念を理解している。  (2) 国際理解教育あるいは複言語・複文化教育の視点から小学校外国語授業を分析・評価できる。  (3) 国際理解教育あるいは複言語・複文化教育としての外国語教育を計画・実践できる。  (87 吉村雅仁) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。  (74 前田康二) 副担当として、授業の実務的な補足、及び院生の議論のファシリテートの支援を行う。</p>	共同
		教科の原理と授業づくり (算数・数学)	<p>算数・数学教育について考えるための多様な視点を提供することをねらいとし、複数の教科教育専門の教員によるオムニバス形式により講義・演習を行う。まず、算数・数学教育の目的・目標、内容、方法、評価などの原理に関する講義を行うとともに、算数・数学科の授業をつくるために必要な知識や見方・考え方を身に付けるための演習を行う。次に、算数・数学科の授業の分析に関する理論的前提・基礎的な知識について講義し、実際に収集された算数・数学科授業データを分析する演習を行うことで理解を深める。  (オムニバス方式/全15回)  (20 近藤裕/8回)</p> <p>第1回の「オリエンテーション」と第2～8回を担当し、「算数・数学科教育の原理」および「算数・数学科の授業づくり」をテーマにした講義を行う。  (65 舟橋友香/7回)</p> <p>第9回～第14回の講義では、質的研究方法を中心とした算数・数学科の授業分析の理論について講義した上で、その手法を用いた授業の分析(演習)を行う。第15回の講義では、これまでの学びを振り返り、そのまとめを行う。</p>	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	教科教育科目	ICTを含む授業実践 (算数・数学)	オムニバス・共同 (一部)
		教科内容と教材開発 (解析)	オムニバス
		教科内容と教材開発 (確率・統計)	オムニバス
		教科内容と教材開発 (コンピュータ・応用数学)	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	教科教育科目	教科内容と教材開発(代数)	算数・数学科の教材開発に関わる基本的な考えについて解説する。小学校算数、中学校数学及び高等学校数学の代数学領域の各単元における専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに教材開発及び教育実践を行うことが重要である。これらのことを踏まえ、小学校から高等学校までの教育課程を理解し、代数学は学際的分野であることや自然数・整数・実数などの本質的に我々の思考の原点となるような算数・数学の対象の構造を理解し、身近に接する論理と深くか関わりのある分野であることを理解した上で、院生自らが教材開発につなげられるような授業展開とする。 (オムニバス方式/全15回) (17 川崎謙一郎/14回) 第1回および第3回から第15回までを行い学校教育課程 算数・数学科で学習する算数・数学の内容の、主に代数的な側面およびその発展や学術的背景について取り扱う。 (20 近藤裕/1回) 第2回を担当し、「教材開発の基本」をテーマにした講義を行う。	オムニバス
		教科内容と教材開発(幾何)	算数・数学科の教材開発に関わる基本的な考えについて解説する。小学校算数、中学校数学及び高等学校数学の幾何学領域の各単元における専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに教材開発及び教育実践を行うことが重要である。これらのことを踏まえ、小学校から高等学校までの教育課程を理解し、幾何学は学際的分野であることや身近に接する形あるものは算数・数学科における幾何学的構造により形成されることを理解した上で、院生自らが教材開発につなげられるような授業展開とする。 (オムニバス方式/全15回) (123 田山育男/14回) 第1回および第3回から第15回までを行い学校教育課程 算数・数学科で学習する算数・数学の内容の、主に幾何学的な側面およびその発展や学術的背景について取り扱う。 (65 舟橋友香/1回) 第2回を担当し、「教材開発の基本」をテーマにした講義を行う。	オムニバス
		教科の原理と授業づくり(理科)	理科教育の基礎原理について理解し、教科専門教員から「これからの理科教育に寄せる期待」についての講話を受ける。続いて、学校で理科を教える意味や理科教育の原理(目標・内容・方法・評価)の研究と学習指導要領の考え方について理解する。その上で、実践事例を原理と結びつけて解釈するとともに、自分で設定した課題を解決する方法・教具等を開発し、実際の授業における授業構想力と実践力を養う。 (オムニバス方式/全15回) (6 石井俊行/12回) 全15回のうち、第1回、4～13回、第15回を担当し、第1回では理科教育の基礎原理について理解し、第4～13回では理科教育を教える意味と学習指導要領の流れについて検討し、それを踏まえた課題を見出す。そして、その課題を解決するための研究デザインを作成し、その自分の見出した課題を解決するための具体的な方法(教材等)を検討する。また、実際にどのように指導すれば理解が深まるのかについて検討し、学習指導案を立案する。第15回は、本授業のまとめと反省を行う。 (6 石井俊行、31 中村元彦、14 梶原篤、7 石田正樹、36 藤井智康/3回) (共同) 全15回のうち、第2～3回、14回を担当し、第2～3回には、「これからの理科教育に寄せる期待」についての講話をする。第14回には、学習指導案を立案し、自らの授業を省察し、本科目で学んだことを発表し、教科教育教員・教科専門教員・院生により批評し合う。	オムニバス・共同(一部)
		ICTを含む授業実践(理科)	「教科の原理と授業づくり(理科)」での学びをもとに、実際に理科の授業を構想し、実践できる力を身に付ける。理科教育の原理や理論に裏付けられた授業の指導案に基づき、デジタル教科書やICT機器等を活用した模擬授業を行って、授業実践の力量を向上させる。 (オムニバス方式/全15回) (91 森本弘一/11回) 全15回のうち、第1～10回と第15回を担当し、小学校・中学校・高等学校理科における理科教育の原理、実践事例を挙げ、それについて検討させる。ICTを活用した授業の展開を考えさせ、学習指導案を立案させる。また、第15回には本授業のまとめを行う。 (91 森本弘一、29 常田琢、90 松山豊樹、39 山崎祥子、55 小長谷達郎、63 信川正順、42 和田穰隆/4回) (共同) 全15回のうち、第11～14回を担当する。第10回までに作成した指導案に基づき、ICT機器等を用いた模擬授業を実践し、その評価会を行う。	オムニバス・共同(一部)
		教科内容と教材開発(理科：物理分野)	小学校理科、中学校理科第1分野及び高等学校理科の物理領域の各単元における専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに教材開発及び教育実践を行うことが重要である。これらのことを踏まえ、小学校から高等学校までの教育課程を理解していること、物理学は数学と関わりが深く学際的分野の基礎科学であること、宇宙や物質の本質の解明のためのアプローチを知ること、同時に身近に生じる自然現象と深く関わりのある分野であることを理解した上で、院生自らが教材開発につなげられるような授業展開とする。 (オムニバス方式/全15回) (6 石井俊行、90 松山豊樹、31 中村元彦、29 常田琢/2回) (共同) 全15回のうち、第1、第2回を担当し、小学校・中学校・高等学校理科における物理領域の課程編成の分析・検討をテーマにした講義を行う。 (90 松山豊樹、31 中村元彦、29 常田琢/13回) (共同) 全15回のうち、第3～15回を担当し、物理教育教材の科学的・教育的効果の検討、院生による物理教育教材の改善や提案を行わせる。また、実際の理科授業を想定した物理教育教材を院生に演示させる。	オムニバス・共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	教 科 教 育 科 目	教科内容と教材開発 (理科：化学分野)	<p>小学校理科、中学校理科第1分野、及び高等学校理科の化学領域の各単元における専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに教材開発及び教育実践を行うことが重要である。これらのことを踏まえ、小学校から高等学校までの教育課程を理解し、単に専門的知識だけでなく、化学は学際的分野であることや、身の回りの物質や現象と深く関わりのある分野であることを理解したうえで、学院生自らが教材開発につながられるような授業展開とする (オムニバス方式/全15回) (6 石井俊行、39 山崎祥子、14 梶原篤/4回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第1回、第2回、第14回、15回を担当し、小学校・中学校・高等学校理科における化学領域の課程編成の分析・検討をテーマにした講義を行う。 (39 山崎祥子、14 梶原篤/11回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第3～13回を担当し、化学教育教材の科学的・教育的効果の検討、院生による化学教育教材の改善や提案を行わせる。また、実際の理科授業を想定した化学教育教材を院生に演示させて評価を行う。</p>	オムニバス・共同
		教科内容と教材開発 (理科：生物分野)	<p>小学校理科、中学校理科第2分野および高等学校理科の生物領域の教育課程を理解した上で、各単元における専門領域の学術的背景を理解し、高度かつ最新の専門的知識をもとに教材開発および教育実践を行うことは重要である。また、生物学が生命現象と自然におけるその存在様式を対象とする学問分野であり、学際的であることを理解し、院生が自立して自分独自の研究を行い、その内容を教材開発につなげられるような授業展開とする。 (オムニバス方式/全15回) (91 森本弘一、7 石田正樹、55 小長谷達郎、28 辻野亮/2回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第1、第2回を担当し、小学校・中学校・高等学校理科における生物領域の課程編成の分析・検討をテーマにした講義を行う。 (7 石田正樹、55 小長谷達郎、28 辻野亮/13回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第3～15回を担当し、生物教育教材の科学的・教育的効果の検討、院生による生物教育教材の改善や提案を行わせる。また、実際の理科授業を想定した生物教育教材を院生に演示させる。</p>	オムニバス・共同
		教科内容と教材開発 (理科：地学分野)	<p>小学校理科、中学校理科第2分野及び高等学校理科の地学領域の各単元における専門領域の学術的背景を理解し、高度な専門的知識をもとに教材開発及び教育実践を行うことが重要である。これらのことを踏まえ、小学校から高等学校までの教育課程を理解し、単に専門的知識だけでなく、地学は学際的分野であることや身近に生じる自然現象や自然災害とも深く関わりのある分野であることを理解した上で、院生自らが教材開発につなげられるような授業展開とする。 (オムニバス方式/全15回) (91 森本弘一、42 和田穰隆、36 藤井智康、63 信川正順/2回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第1、第2回を担当し、小学校・中学校・高等学校理科における地学領域の課程編成の分析・検討をテーマにした講義を行う。 (42 和田穰隆、36 藤井智康、63 信川正順/13回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第3～15回を担当し、地学教育教材の科学的・教育的効果の検討、院生による地学教育教材の改善や提案を行わせる。また、実際の理科授業を想定した地学教育教材を演示させる。</p>	オムニバス・共同
		教科の原理と授業づくり (技術)	<p>まず、教科専門教員より、その専門の立場から「これからの技術教育に寄せる期待」についての講話を受ける。それに続き、普通教育において技術を教えること、学ぶことの意義や技術教育の原理(目標・内容・方法・評価)を、先行研究や学習指導要領等を用いて理解する。その上で、実践事例を原理と結び付けて解釈できる力、年間指導計画や学習指導案を適切に立案できる力、学術的根拠をもって自らの授業を省察したり実践事例を分析する力を身に付ける。最終の2回は、本科目で学んだことを発表し、教科教育教員・教科専門教員・院生により協議・検討を行う。 (オムニバス方式/全15回) (56 世良啓太/12回)</p> <p>ガイダンス、技術教育の原理、学習指導要領の分析、年間指導計画の立案、授業設計、授業分析 (38 藪哲郎、69 箕作和彦/1回) (共同)</p> <p>これからの技術教育に寄せる期待 (56 世良啓太、38 藪哲郎、69 箕作和彦/2回) (共同)</p> <p>学習成果発表</p>	オムニバス・共同(一部)
		ICTを含む授業実践 (技術)	<p>「教科の原理と授業づくり(技術)」での学びをもとに、実際に技術科の授業を構想し、実践できる力を身に付ける。その指導案は、技術教育の原理や理論に裏付けられたものでなくてはならない。そして、立案した学習指導案に基づき、授業実践の力量を模擬授業等によって身に付ける。 (オムニバス方式/全15回) (56 世良啓太/8回)</p> <p>ガイダンス、実践事例から学ぶ、指導案立案、まとめ (38 藪哲郎/2回)</p> <p>技術科教育実践におけるICTの活用Ⅰ、技術科教育実践におけるICTの活用Ⅱ (69 箕作和彦/2回)</p> <p>技術科教育実践におけるICTの活用Ⅲ、技術科教育実践におけるICTの活用Ⅳ (56 世良啓太、38 藪哲郎、69 箕作和彦/3回) (共同)</p> <p>模擬授業による批評会</p>	オムニバス・共同(一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	教科内容と教材開発 (技術：電気情報分野)	<p>中学校技術における電気・情報分野の内容・課程編成を理解する。それには高度な専門的知識と実践する技術が必要である。次に、論文などをリサーチし、すでに提案されている教材の検討を行う。そのためには机上の検討だけでなく、実験などが必要である。次に教材の改良および開発を行う。技術の教材開発には実験と試行錯誤の繰り返しが必要である。開発した教材の検証を行い、さらなる改良を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (56 世良啓太、38 藪哲郎/2回) (共同)</p> <p>中学校技術における電気・情報分野の課程編成の分析・検討、技術の授業を想定した教材の演示 (38 藪哲郎/13回)</p> <p>電気・情報分野の教材の検討・改良・開発</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科内容と教材開発 (技術：栽培分野)	<p>中学校技術における栽培分野の内容・課程編成を理解する。それには高度な専門的知識と実践するための技能が必要である。次に、研究論文などをリサーチし、すでに提案されている教材について検討する。そのためには教材についての机上の検討だけでなく、植物栽培に関する実験などが必要である。さらに、実験を活かした教材を開発する。技術の教材開発には実験と試行錯誤の繰り返しが必要である。また、開発した教材の検証を行い、さらなる改良を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (56 世良啓太、69 箕作和彦/2回) (共同)</p> <p>中学校技術における栽培分野の課程編成の分析・検討、技術の授業を想定した教材の演示 (69 箕作和彦/13回)</p> <p>栽培分野の教材の検討、教材に関する実験、教材の改良、教材の開発</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科の原理と授業づくり (家庭科)	<p>家庭科の教科特性、および児童生徒の発達段階に応じた教科内容を理解したうえで、「生活」を総合的に捉えながら家庭科の授業の構成ができるようになることを目指す。</p> <p>そのために、小学校・中学校・高等学校の家庭科の学習指導要領および学習指導案について広角的に分析する。それらを踏まえて、生活科学の視点を重視しながら「家庭経営学分野」「食食物学分野」「保育学分野」「消費者教育分野」「被服学分野」「住居学分野」の授業構成について考究する。さらに、家庭科教育と教科専門のT.T.で授業を担当することで、学校種ごとの教科の理解と、生活関連諸科学の知見・認識を統合させ、小学校・中学校・高等学校家庭科における体系的な授業づくりを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (130 松本歩子・71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>家庭科の根本原理を考究し、家庭科の本質、独自性、科学的立場等について講義する。 (130 松本歩子/3回)</p> <p>小学校家庭科における学習指導要領、学習指導案、年間指導計画、評価方法について講義する。 (130 松本歩子、26 立松麻衣子/1回) (共同)</p> <p>小学校家庭科の家庭経営学分野の授業研究および授業分析を行う。 (130 松本歩子、22 杉山薫/1回) (共同)</p> <p>小学校家庭科の食物学分野の授業研究および授業分析を行う。 (71 村上睦美/6回)</p> <p>中学校・高等学校家庭科における学習指導要領、学習指導案、年間指導計画、評価方法について講義する。また、消費者教育分野、被服学分野、住居学分野の授業研究を行う。 (71 村上睦美、26 立松麻衣子/1回) (共同)</p> <p>中学校・高等学校家庭科の家庭経営学分野について授業研究および授業分析を行う。 (71 村上睦美、22 杉山薫/1回) (共同)</p> <p>中学校・高等学校家庭科の食物学分野の授業研究および授業分析を行う。 (71 村上睦美、60 中川愛/1回) (共同)</p> <p>中学校・高等学校家庭科の保育学分野の授業研究および授業分析を行う。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目  教 科 教 育 科 目	ICTを含む授業実践 (家庭科)	<p>児童生徒の発達段階に応じて「生活」を総合的に捉えることができる高度な授業構成と学習指導を伴った授業実践力の向上を目指す。</p> <p>そのために、家政学の学習指導理論を踏まえて、「食物学」「家庭経営学」「保育学」の各分野において「教材研究・学習指導案作成」「模擬授業および検討会」「授業改善」を行い、学習課題の分析力、授業設計力、ICT活用力、授業評価力を高める。さらに、家庭科教育と教科専門によるT.T.で授業を担当することで、児童生徒の発達および教科論・授業論の理解と、生活関連諸科学の知見・認識を統合させ、小学校・中学校・高等学校家庭科における先進的な授業実践開発を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(71 村上睦美、130 松本歩子/3回) (共同)</p> <p>家庭科の学習指導を通して、知識・認識・技能を習得させ、児童生徒の人格を発達させていく教育的働きかけについて講義する。また、適切なICT活用によって思考力を深める問題解決的学習や興味関心を引き出す学習の方法を検討する。</p> <p>(130 松本歩子、22 杉山薫/1回) (共同)</p> <p>小学校家庭科の食物学分野の教材研究と学習指導案の作成を行う。</p> <p>(71 村上睦美、22 杉山薫/1回) (共同)</p> <p>中学校・高等学校家庭科の食物学分野の教材研究と学習指導案の作成を行う。</p> <p>(130 松本歩子、71 村上睦美、22 杉山薫/2回) (共同)</p> <p>ICTを活用した食物学分野の模擬授業および検討会を行い、授業改善を重ねる。</p> <p>(130 松本歩子、26 立松麻衣子/1回) (共同)</p> <p>小学校家庭科の家庭経営学分野の教材研究と学習指導案の作成を行う。</p> <p>(71 村上睦美、26 立松麻衣子/1回) (共同)</p> <p>中学校・高等学校家庭科の家庭経営学分野の教材研究と学習指導案の作成を行う。</p> <p>(130 松本歩子、71 村上睦美、26 立松麻衣子/2回) (共同)</p> <p>ICTを活用した家庭経営学分野の模擬授業および検討会を行い、授業改善を重ねる。</p> <p>(71 村上睦美、60 中川愛/4回) (共同)</p> <p>中学校・高等学校家庭科の保育学分野の教材研究と学習指導案の作成、ICTを活用した模擬授業および検討会を行い、授業改善を重ねる。</p>	オムニバス・共同
	教科内容と教材開発 (生活デザイン領域)	<p>家庭科の内容と学習の系統性を理解したうえで、児童生徒の発達段階に応じて「生活」を科学的に捉えることができる教材について理解することを目指す。</p> <p>そのために、家庭科の専門分野(被服学・住居学)を基盤とした生活関連諸科学の成果を踏まえて教材の分析・開発を行い、教科指導法を検討し、教育実践との関連性についても考究する。さらに、家庭科教育と教科専門によるT.T.や、教科専門の融合によるT.T.で授業を担当することで、児童生徒の発達および教科の理解と、生活関連諸科学の知見・認識を統合させ、小学校・中学校・高等学校家庭科における先進的な教材開発を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(117 木林有理子/4回)</p> <p>衣文化、被服材料、被服構成、被服管理、被服生理に関する教材研究を行う。</p> <p>(117 木林有理子、26 立松麻衣子/1回) (共同)</p> <p>被服学と家庭経営学の分野を融合させて、高齢者の被服行動を科学的に捉えた教材研究を行う。</p> <p>(117 木林有理子、60 中川愛/1回) (共同)</p> <p>被服学と保育学の分野を融合させて、子どもの被服行動を科学的に捉えた教材研究を行う。</p> <p>(117 木林有理子、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>被服学と教科教育の共同によって、被服学分野の指導法を検討する。</p> <p>(121 清水裕子/5回)</p> <p>住文化、住居計画、住居管理、近隣環境、まちづくりに関する教材研究を行う。</p> <p>(121 清水裕子、26 立松麻衣子/1回) (共同)</p> <p>住居学と家庭経営学の分野を融合させて、高齢者の住行動を科学的に捉えた教材研究を行う。</p> <p>(121 清水裕子、60 中川愛/1回) (共同)</p> <p>住居学と保育学の分野を融合させて、子どもの住行動を科学的に捉えた教材研究を行う。</p> <p>(121 清水裕子、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>住居学と教科教育の共同によって、住居学分野の指導法を検討する。</p>	オムニバス・共同(一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	教科内容と教材開発 (生活科学基礎実験領域)	<p>家庭科の内容と学習の系統性を理解したうえで、児童生徒の発達段階に応じて「生活」を科学的に捉えることができる実験実習教材について理解することを目指す。</p> <p>家庭科は生活環境を取り扱う実証的な科目であり、本来、実技の習得のみならず、実験のもつウエイトは大きい。しかしながら、現場で指導する教員に実験の基礎が浸透していないことなどから、技能習得にのみ時間が割かれているのが現状である。この授業においては、生活に関わる実験を遂行するために必要な基本的な事項の学習をする。また、実際に衣食住の各領域における家庭科の授業で活用できる実験実習を創造する能力を身に付けるため、提示された題材に関する実験実習を考案する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (117 木林有理子/4回)</p> <p>被服材料、被服構成、被服管理、被服生理に関する実験実習の教材研究を行う。 (117 木林有理子、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>被服学と教科教育の共同によって、被服学実験実習の指導法を検討する。 (22 杉山薫/5回)</p> <p>栄養学、食品学、食品衛生学、食品加工・貯蔵、調理学に関する実験実習の教材研究を行う。 (22 杉山薫、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>食物学と教科教育の共同によって、食物学実験実習の指導法を検討する。 (121 清水裕子/3回)</p> <p>住居計画、屋内環境、屋外環境に関する実験実習の教材研究を行う。 (121 清水裕子、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>住居学と教科教育の共同によって、住居学実験実習の指導法を検討する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科内容と教材開発 (健康生活領域)	<p>家庭科の内容と学習の系統性を理解したうえで、児童生徒の発達段階に応じて「生活」を科学的に捉えることができる教材について理解することを目指す。</p> <p>そのために、家庭科の専門分野(家庭経営学、保育学、消費者教育、食物学)を基盤とした生活関連諸科学の成果を踏まえて教材の分析・開発を行い、教科指導法を検討し、教育実践との関連性についても考究する。さらに、家庭科教育と教科専門の教員によるT.T.で授業を担当することで、児童生徒の発達および教科の理解と、生活関連諸科学の知見・認識を統合させ、小学校・中学校・高等学校家庭科における先進的な教材開発を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (26 立松麻衣子/3回)</p> <p>生活設計、家族関係、家族福祉に関する教材研究を行う。 (26 立松麻衣子、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>家庭経営学と教科教育の共同によって、家庭経営学分野の指導法を検討する。 (60 中川愛/3回)</p> <p>子どもの成長・発達について健康・環境、言葉・表現、人間関係から教材研究を行う。 (60 中川愛、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>保育学と教科教育の共同によって、保育学分野の指導法を検討する。 (71 村上睦美/3回)</p> <p>消費者法、消費者保護に関する教材研究を行い、消費者教育の指導法を検討する。 (22 杉山薫/3回)</p> <p>栄養、食品・調理、食品衛生・保蔵に関する教材研究を行う。 (22 杉山薫、71 村上睦美/1回) (共同)</p> <p>食物学と教科教育の共同によって、食物学分野の指導法を検討する。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	教科の原理と授業づくり (音楽)	<p>音楽科教育は時代によって異なった役割を果たしてきた。本授業では、まずこれまでの日本音楽科教育の歴史を辿り、音楽の本質や今日のSTEAM教育、ESDの観点からみる音楽科教育の重要性を理解する。また、音楽科教育の原理 (目標・内容・方法・評価) を学習指導要領及び先行研究を通して把握する。その上で、小中学校音楽科の4つの活動である歌唱、器楽、音楽づくり (創作)、鑑賞の授業構成、指導法、学習指導案を、年間指導計画や題材の指導計画と結びつけ、受講者が自ら授業を考案し、実践する。最終的には、この授業で学んだことについて、受講者が口頭発表を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (41 劉麟玉/9回)</p> <p>全15回の授業の内、第1回～8回、第12回を担当する。第2回は日本の教育史の大きな流れから音楽科が担ってきた役割について、第3回～4回は音楽の本質とSTEAM教育およびESDの観点から音楽科教育の重要性について講義を行う。第5回～8回は新学習指導要領の分析と解説を行い、院生に指導計画を立案するための力を身につけさせる。第12回は鑑賞領域の授業をつくるための音楽の鑑賞法、授業構成、指導法、学習指導案の作成法についてアドバイスする。 (41 劉麟玉、68 水野亜歴/1回) (共同)</p> <p>第9回は声楽家の専門的観点を交え、小中学校の歌唱授業をつくるための授業構成、指導法、学習指導案の作成法、歌唱法についてアドバイスする。 (41 劉麟玉、129 前田則子/1回) (共同)</p> <p>第10回はピアニストの専門的観点を交え、小中学校の器楽授業をつくるための授業構成、指導法、学習指導案の作成法、教材のピアノ伴奏法についてアドバイスする。 (41 劉麟玉、66 北條美香代/2回) (共同)</p> <p>第11回は作曲家の専門的観点を交え、小中学校の音楽づくり (創作) 授業をつくるための授業構成、指導法、学習指導案の作成法、教材の分析についてアドバイスする。第14回は院生が考案した音楽づくり (創作) の授業案の妥当性および模擬授業の問題点を検討する。 (41 劉麟玉、68 水野亜歴、129 前田則子/1回) (共同)</p> <p>第13回は院生が考案した歌唱と器楽の授業案の妥当性および模擬授業の問題点を検討する。 (41 劉麟玉、129 前田則子、66 北條美香代、68 水野亜歴/1回) (共同)</p> <p>第15回は院生が本授業で学んだことについてのリフレクションを口頭発表する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	ICTを含む授業実践 (音楽)	<p>本授業では、音楽科としてのプログラミング教育を実現させるために、音楽科におけるICT、プログラミング教育は何かということ、様々な実践例について調査・考察した上で、音楽科で活用できる様々なICT機器 (シンセサイザー、音響機器、創作ソフトやアプリケーション等) の活用法を学び、それらを用いた実践的な授業プログラムを立案し、実際の教育現場で実践する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (41 劉麟玉/3回)</p> <p>1～3回は、新学習指導要領において必修化されたプログラミング教育、STEAM教育の概要及び様々な実践例について講義を行い、考察する。 (66 北條美香代、68 水野亜歴/6回) (共同)</p> <p>4～9回は、実際に、音楽科で活用できる様々なICT機器 (シンセサイザー、音響機器、創作ソフトやアプリケーション等) について、その活用法を学び、これらを用いた実践的な授業プログラムを立案する。 (66 北條美香代、41 劉麟玉、129 前田則子、68 水野亜歴/6回) (共同)</p> <p>10～15回は、立案した授業プログラムを、実際の教育現場で実践し、振り返りを行う。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科内容と教材開発 (鑑賞・創作)	<p>音楽科授業における鑑賞領域では、楽曲についての構造、背景などの知識を修得することが必要不可欠である。また、創作領域を教えるために、教師自身の創作・編曲技術の必要性は明らかであるが、その他、これらの技術や能力は器楽や鑑賞、歌唱においても教材を開発する際に必要な技術であると言える。以上を踏まえ、本授業では、楽曲の構造理解のためのアナリーゼの知識と創作・編曲技術の習得を目指して展開することとする。</p> <p>(オムニバス/全15回) (66 北條美香代、41 劉麟玉/2回) (共同)</p> <p>全授業15回の内、第1回、第7回を担当する。新学習指導要領を元に、音楽科における鑑賞及び創作をテーマにした講義を行い、各領域の役割を明らかにする。 (66 北條美香代/10回)</p> <p>2～6回は、鑑賞教材として取り上げられている様々な時代の作品について、その音楽構造を明らかにする。8～12回は、鑑賞教材で研究した楽式、様式の内容を踏まえ、院生が自ら児童、生徒に向けて発信するための作品を創作し、創作についてのアドバイスを行う。 (66 北條美香代、129 前田則子、68 水野亜歴/2回) (共同)</p> <p>13～14回は、院生が創作した作品について、児童や生徒に表現者として披露する際の演奏法についてアドバイスを行う。 (66 北條美香代、129 前田則子、68 水野亜歴、41 劉麟玉/1回) (共同)</p> <p>全授業15回のまとめとして、音楽会を企画し、創作作品を発表する。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	教科内容と教材開発 (表現領域・ピアノ)	<p>教職大学院でピアノを学ぶ意味は、表現の原理をピアノ演奏を通して理解し、それを音楽科授業において児童生徒に伝え、表現力や感性、創造性の育成に寄与させることが第一義となる。加えて、ピアノ曲を鑑賞教材として自ら演奏したり、優れた歌唱表現を導くためのピアノの効果を追究することにある。これらのことを踏まえ、本授業では、単に院生自身の演奏テクニックを身に付けるのではなく、ピアノ演奏を通して常に「表現するとはどういうことか」を考え、表現力と教材としてのピアノ曲の解釈を往還させて展開することとする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(41 劉麟玉、129 前田則子/3回) (共同)</p> <p>全授業15回のうち、第1、9、10回を担当する。新学習指導要領を元に「表現の原理」をテーマにした講義を行い、音楽科授業におけるピアノの役割を理解する。子供に提示するプログラムノートの作成方法を解説し、作成する。</p> <p>(66 北條美香代、129 前田則子/2回) (共同)</p> <p>全授業15回のうち、第2、3回を担当する。教材としての可能性を持つピアノ曲について、楽曲の分析方法について解説を行った上で、院生が自ら選んだ楽曲の分析を行う。</p> <p>(129 前田則子/7回)</p> <p>全授業15回のうち、第4～6回は、教材としての可能性を持つピアノ曲を院生が自ら選んで練習し、公開レッスン形式で演奏法のアドバイスをを行う。第11～14回は、鑑賞教材として教師がピアノ演奏を行う際、子どもや生徒に伝えるべきポイントを明確に設定した演奏法について追究する。</p> <p>(68 水野亜歴、129 前田則子/2回) (共同)</p> <p>全授業15回のうち、第7、8回を担当する。優れた歌唱表現を導くために、音高やリズム、強弱表現、音色や情感など、様々な焦点に絞ったピアノ伴奏方法を考え、その効果を検証する。院生が選曲し、模擬授業形式で行う。</p> <p>(41 劉麟玉、129 前田則子、66 北條美香代、68 水野亜歴/1回) (共同)</p> <p>全授業15回のまとめとして、音楽会を企画し、演奏発表する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科内容と教材開発 (表現領域・声楽)	<p>教職大学院で声楽を学ぶ意味は、表現の原理を声楽演奏を通して理解し、それを音楽科授業において児童生徒に伝え、表現力や感性、創造性の育成に寄与させることが第一義となる。加えて、鑑賞教材として自ら演奏したり、言葉の特徴等による演奏法の違いについて理解し、追究することにある。これらのことを踏まえ、本授業では、単に院生自身の演奏テクニックを身に付けるのではなく、声楽演奏を通して常に「表現するとはどういうことか」を考え、表現力と教材としての声楽曲の解釈を往還させて展開することとする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(41 劉麟玉、68 水野亜歴/3回) (共同)</p> <p>全授業15回のうち、第1、8、9回を担当する。新学習指導要領を元に「表現の原理」をテーマにした講義を行い、音楽科授業における声楽の役割を理解する。教材としての可能性を持つ伝統音楽の分析方法について解説した上で、院生が自ら選んだ楽曲の分析を行う。子供に提示するプログラムノートの作成方法を解説し、作成する。</p> <p>(66 北條美香代、68 水野亜歴/3回) (共同)</p> <p>全授業15回のうち、第2、3、4回を担当する。教材としての可能性を持つ日本の声楽曲について、楽曲の分析方法を解説した上で、院生が自ら選んだ楽曲の分析と演奏を行い、演奏についてのアドバイスをを行う。</p> <p>(68 水野亜歴/8回)</p> <p>全授業15回のうち、第5～7回は、教材としての可能性を持つ「西洋の声楽曲」「オペラアリア」「ポピュラー音楽」の分析方法について解説した上で、演奏法のアドバイスをを行う。第10～14回は、鑑賞教材として教師が自ら演奏を行う際、子どもや生徒に伝えるべきポイントを明確に設定した演奏法について追究する。</p> <p>(41 劉麟玉、129 前田則子、66 北條美香代、68 水野亜歴/1回) (共同)</p> <p>全授業15回のまとめとして、音楽会を企画し、演奏発表する。</p>	オムニバス・共同 (一部)
	教科の原理と授業づくり (図画工作・美術)	<p>授業前半では、表現、鑑賞という2つの領域を持つ&lt;図画工作・美術科の授業や題材のあり方&gt;について海外文献購読も交えて学び、学習指導案・授業づくりの基盤を作る。これをふまえた授業後半では、鑑賞学習を中心に据え、受講生独自の質の高い授業をつくりあげてを課題として、授業を進める。鑑賞学習の変遷と内容、実践事例からの学びとプランづくり、鑑賞学習の展開と評価などについて学修する。</p> <p>最終の2回は、以上をふまえ、受講生が模擬授業を行い、討議会を持つ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(12 宇田秀士、25 竹内晋平/3回) (共同)</p> <p>第1回では、授業全体のオリエンテーションを行い、第14、15回では、それまでの授業をふまえた模擬授業・討議の場を持つ。</p> <p>(25 竹内晋平/4回)</p> <p>第2～4回では、図画工作・美術科授業の構造について明らかにするとともに、海外文献等の講義をとおして授業の原理について考察する。また第5回では、具体的な題材をとりあげて図画工作・美術科における授業設計を行う。</p> <p>(12 宇田秀士/8回)</p> <p>第6～13回では、具体的な題材をとりあげて図画工作・美術科の鑑賞題材の授業設計を行い、授業作りの要点を把握する。</p>	オムニバス・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	ICTを含む授業実践 (図画工作・美術)	<p>ICT教育の視点から実際に図画工作・美術の授業を構想し、実践できる力を身に付ける。学習指導案作成および模擬授業の実施を通して、実践的指導力を習得することを目指す。また、デジタル教科書やICT機器を用いた実践、動画コンテンツの作成等についても学び、その力量を身に付けるとともに模擬授業において実践する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (25 竹内晋平、53 狩野宏明/3回) (共同)</p> <p>第1回では、授業全体のオリエンテーションを行い、第14、15回では、それまでの授業をふまえた模擬授業・討議の場を持つ。ICT機器等を活用した模擬授業の実践を通して、どのような図画工作・美術科授業の改善に資することができるのかについて考察する。</p> <p>(25 竹内晋平/6回)</p> <p>第2～7回では、図画工作・美術科に関する授業方法論的な検討を行い、ICT機器等を活用した学習指導(デジタル教科書、遠隔授業、動画コンテンツ)のあり方についての考察を深めるとともに学習指導案の作成を行う。</p> <p>(53 狩野宏明/6回)</p> <p>第8～13回では、ICT機器等を活用した題材と授業構想について、絵画領域における表現と鑑賞の観点から考察する。</p>	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発<絵画分野・絵に表す-平面的な造形表現>	<p>小学校図画工作科・中学校美術科における主に「絵に表す」「絵画」分野に焦点をあてて、受講者の関心のある教材・題材や指導方法を軸に理論や表現技法を学ぶ。そして、理論と実践を往還しながら教材分析・開発、授業づくりを行う。また、造形作品制作としての表現学習だけでなく、鑑賞学習への展開もできるように学習する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (12 宇田秀士/1回)</p> <p>第1回では、小・中学校に図画工作・美術における「絵に表す」「絵画」領域の課程編成の分析・検討を行う。</p> <p>(53 狩野宏明/12回)</p> <p>第2～13回では、「絵に表す」「絵画」に関する理論と技法について、受講者の関心のある教材・題材や指導方法を軸に学び、表現と鑑賞の観点から考察する。</p> <p>(53 狩野宏明、12 宇田秀士/2回) (共同)</p> <p>第14～15回では、「絵に表す」「絵画」教材の演示を通して、図画工作科および美術科授業への展開について学びを深める。</p>	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発<工芸分野・デザイン分野・工作に表す-用途のある造形表現>	<p>小学校図画工作科・中学校美術科における主に「工芸」「デザイン」と「工作に表す」の内の「用途のある造形表現」の領域に焦点をあて、研究する。さらにその分析を踏まえ、理論と実践を往還しながら教材分析・開発、授業づくりを行う。造形作品制作としての表現学習だけでなく、鑑賞学習への展開もできるように学習する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (12 宇田秀士/1回)</p> <p>小・中学校に図画工作・美術における「用途のある造形表現」領域の課程編成の分析・検討を行う。</p> <p>(64 原山健一/12回)</p> <p>第2～7回では、工芸(陶芸)の基本的な知識の習得、作品鑑賞、制作を通じた技法の研究を行う。また第8～13回では、パッケージデザインを題材とし、デザインの基本的な知識の習得、作品鑑賞、制作を通じた技法の研究を行う。</p> <p>(64 原山健一、12 宇田秀士/2回) (共同)</p> <p>第14～15回では、受講生に図画工作・美術授業を想定した「用途のある造形表現」教材の提示をさせ、討議の場を持つ。</p>	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発<彫刻分野・立体に表す・造形遊び-立体的な造形表現>	<p>小学校図画工作科・中学校美術科における主に「彫刻」「立体にあらわす」「造形遊び」といった「立体的な造形表現」領域に焦点をあて、様々な表現技法について研究する。さらにその分析を踏まえ、理論と実践を往還しながら教材分析・開発、授業づくりを行う。作品制作としての造形表現学習だけでなく、鑑賞学習への展開もできるように学習する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (12 宇田秀士/1回)</p> <p>小・中学校 図画工作・美術における「立体的な造形表現」領域の課程編成の分析・検討を行う。</p> <p>(64 原山健一/9回)</p> <p>第2～7回では、粘土を使った立体表現について、使用する材料など基本的な知識の習得、作品鑑賞、制作を通じた技法の研究を行う。また第8～10回では、粘土以外を使用した彫刻表現について、基本的な知識の習得、作品鑑賞、制作を通じた技法の研究を行う。</p> <p>(12 宇田秀士/3回)</p> <p>第11-13回では、「造形遊び」に関する理論を提示し、具体的な材料、用具、技法の研究を行う。</p> <p>(64 原山健一、12 宇田秀士/2回) (共同)</p> <p>第14-15回では、図画工作・美術授業を想定した受講生に「立体的な造形表現」教材の演示をさせ、討議の場を持つ。</p>	オムニバス・共同(一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目 教科教育科目	教科の原理と授業づくり（書道）	<p>まず、ガイダンスにおいて全体の流れの説明を聞き、次に、教科専門教員により、その専門の立場から「これからの芸術科書道教育に寄せる期待」についての講話を受ける。それに続き、高等学校で芸術科書道を教え、学ぶ意味や芸術科書道教育の実践事例を原理と結び付けて解釈できる力、年間学習指導計画や学習指導案を適切に立案できる力、的確な視点をもって自らの授業を省察したり実践事例を分析したりする力を身に付ける。最終2回は、本科目で学んだことを発表し、受講者・教科教育教員・教科専門教員により合批する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （122 谷川雅夫／6回）</p> <p>芸術科書道の全体の授業づくりに関する講義をおこなう。さらに、書道史や書道理論等の分野の講義をおこなう。 （125 福光佐今／3回）</p> <p>楷書、行書、草書を題材とした授業づくりの実践力を身に付けるための演習をおこなう。 （89 豊田宗児／3回）</p> <p>篆書、隸書、篆刻を題材とした授業づくりの実践力を身に付けるための演習をおこなう。 （92 北山聡佳／1回）</p> <p>仮名書道を題材とした授業づくりの実践力を身に付けるための演習をおこなう。 （122 谷川雅夫、89 豊田宗児、125 福光佐今／2回）（共同）</p> <p>実践例に即した授業づくりの発表を通して、実践力育成をおこなう。</p>	オムニバス・共同（一部）
	ICTを含む授業実践（書道）	<p>「教科の原理と授業づくり（書道）」での学びをもとに、実際の書道の授業を構想し、実践できる力を定着させる。その学習指導案は芸術科書道教育の原理や理論に裏付けられたものでなくてはならない。そして、立案した学習指導案に基づき、授業の実践力を模擬授業等によってさらに深めることを目的とする。特に漢字分野を中心に</p> <p>なお、全15回のうち3回はICT機器を用いた実践について学び、その応用する力を身に付ける。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （122 谷川雅夫／2回）</p> <p>芸術科書道の原理や理論についての講義により、学習指導案立案に関する知識を深める。 （125 福光佐今／4回）</p> <p>書道の漢字分野（楷書・行書・草書）を中心とした授業の実践力を深める。ICTを取り入れた実践力育成も併せておこなう。 （89 豊田宗児／4回）</p> <p>書道の漢字分野（篆書・隸書・篆刻）を中心とした授業の実践力を深める。ICTを取り入れた実践力育成も併せておこなう。 （122 谷川雅夫、89 豊田宗児、125 福光佐今／5回）（共同）</p> <p>ICT機器を用いた模擬授業を通して、それらの効果的な使用方法を検討、実践する力を養う。</p>	オムニバス・共同（一部）
	教科内容と教材開発（漢字書法）	<p>教職大学院で「書道・漢字書法」を学ぶ意味は、表現の原理を用筆法を通して理解し、それを授業において生徒に伝え、表現力や感性、創造性の育成に寄与させることが一義となる。加えて、漢字作品を鑑賞教材として自ら臨書創作したり、優れた漢字表現を導くための用筆の効果を追求することにある。</p> <p>これらのことを踏まえ、本授業では、単に受講者自身が書法テクニックを身に付けるのではなく、書法実技を通して常に「表現するとはどういうことか」を考えることを目的とし、表現力と教材としての古典の解釈を往還させて展開することとする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （122 谷川雅夫／2回）</p> <p>芸術科書道における漢字のありかたや作品鑑賞の知識、技能についての講義をおこなう。 （125 福光佐今／6回）</p> <p>楷書、行書、草書を中心とした漢字の技法を中心におこなう。 （89 豊田宗児／6回）</p> <p>篆書、隸書を中心とした漢字の技法および篆刻の技法を中心におこなう。 （122 谷川雅夫、89 豊田宗児、125 福光佐今／1回）（共同）</p> <p>授業を通して制作した作品の発表を通して、芸術科書道における実践例を基に講評をおこなう。</p>	オムニバス・共同（一部）
	教科内容と教材開発（書道史）	<p>高等学校の芸術科書道では、書道の歴史を理解し、高度な専門知識をもとに教材開発及び教育実践を行うことが重要である。本授業では、日本と中国における、漢字と仮名の書道を中心として広く歴史を学ぶ。これを踏まえ、高等学校での教育課程を理解し、単に専門知識だけでなく文学や歴史などの学際的分野とも深く関わりのある分野であることを理解した上で、受講者自らが教材開発につながれることを目的とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （122 谷川雅夫／12回）</p> <p>芸術科書道に深く関係のある書道史の講義をおこなう。 （125 福光佐今／1回）</p> <p>芸術科書道における書道史において、重要な古典作品（楷書・行書・草書）をもとにした実技演習および教材作成をおこなう。 （89 豊田宗児／1回）</p> <p>芸術科書道における書道史において、重要な古典作品（篆書・隸書）をもとにした実技演習および教材作成をおこなう。 （122 谷川雅夫、89 豊田宗児、125 福光佐今／1回）（共同）</p> <p>書道史を想定した模擬授業を通して、講評をおこない、効果的な書道史の授業づくりについての講義をおこなう。</p>	オムニバス・共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	教科内容と教材開発 (書道作品鑑賞)	<p>高等学校芸術科書道において、毛筆や拓本で残された筆跡、特に肉筆での作品鑑賞は重要である。幸い、本学の近隣には奈良国立博物館や大和文華館、寧楽美術館、奈良文化財研究所平城宮跡資料館、奈良市杉岡華邨書道美術館等があり、現物を鑑賞することができる環境にある。また、本学所蔵の数多くの拓本や複製印刷物もある。それらを参考にして、芸術科書道での鑑賞を含む授業づくりやに生徒に見せる教材を作成する力を育むことを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (122 谷川雅夫/2回)</p> <p>作品鑑賞や教材の知識を深め、芸術科書道の授業における実践力を身に付ける講義をおこなう。教材の効果的な使用方法や実践力の育成をはかる。</p> <p>(89 豊田宗児/9回)</p> <p>篆書と隸書を中心として、教材開発の力を身に付ける演習をおこなう。併せて、関連が深いフィールドワークをおこない、本物を鑑賞する力やそれらの指導力育成をはかる。</p> <p>(125 福光佐今/3回)</p> <p>楷書、行書、草書を中心として、教材開発の力を身に付ける演習をおこなう。</p> <p>(92 北山聡佳/1回)</p> <p>仮名書道を中心として、教材開発の力を身に付ける演習をおこなう。</p>	オムニバス
	教科の原理と授業づくり (保健体育)	<p>本科目では、これまでの研究成果を踏まえて、保健体育科の授業づくりの背景にある保健体育科教育の原理について理解する。また、保健体育科の教材づくり及び授業づくりについて、実践事例を原理と結びつけて解釈できる力、具体的な教材及び授業を適切に立案できる力、的確な観点をもって自らの授業や他者の授業を評価し、省察できる力を身に付ける。これらの内容を踏まえて、保健体育科の授業研究についての理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (70 宮尾夏姫/10回)</p> <p>全授業15回のうち、第1回～第9回及び第15回を担当し、保健体育科の原理(目標論・教育課程論・学習内容論・運動領域論、教材論・教材づくり論、学習指導論)をテーマに講義し、教材・授業づくり、授業研究について演習形式で指導し、全体のまとめを行う。</p> <p>(3 中井隆司/5回)</p> <p>全授業15回のうち、第10回～第14回を担当し、保健体育科の原理(教師の職能成長)をテーマに講義し、教材・授業づくり、授業研究について演習形式で指導する。</p>	オムニバス
	ICTを含む授業実践(保健体育)	<p>「教科の原理と授業づくり(保健体育)」での学びをもとに、ICT機器を活用し、思考力の育成に資する保健体育科の授業を構想し、実践し、評価・省察できる力を身に付ける。さらに、授業計画に基づき、授業実践の力量を模擬授業等によって身に付けるとともに、実践した授業を実践者である教師、児童、並びに、観察者・指導者というそれぞれの立場から評価し、改善できる力を身に付ける。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (70 宮尾夏姫/11回)</p> <p>全15回のうち、第1回～第4回、第7回～第10回、及び第13回～第15回を担当する。</p> <p>第1回～第4回は、「教科の原理と授業づくり」での学びを振り返り、ICTを活用した保健体育科の教育実践事例及び活用方法について講義・指導する。第7回～第10回は、演習形式にてICTを活用した学習指導計画をテーマに、第13回～第15回は、実践した模擬授業を評価・省察し、改善した授業案をテーマに指導する。</p> <p>(59 立正伸/1回)</p> <p>全15回のうち、第5回の授業を担当し「保健体育科教育実践におけるICTの活用」をテーマに運動領域に関連するICTの活用の具体について指導する。</p> <p>(13 笠次良爾/1回)</p> <p>全15回のうち、第6回の授業を担当し「保健体育科教育実践におけるICTの活用」をテーマに保健領域に関連するICTの活用の具体について指導する。</p> <p>(24 高橋蒙仁、47 井上邦子、70 宮尾夏姫 /1回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第11回の授業を共同で担当し「模擬授業の実践」をテーマに体育分野に関連する模擬授業に対して指導する。</p> <p>(57 高木祐介、70 宮尾夏姫/1回) (共同)</p> <p>全15回のうち、第12回の授業を共同で担当し「模擬授業の実践」をテーマに保健分野に関連する模擬授業に対して指導する。</p>	オムニバス・共同(一部)
	教科内容と教材開発 (運動領域)	<p>本科目は小学校の体育科における運動領域に関する内容、および中学校・高等学校の保健体育科における運動領域に関する内容を取り上げるものである。その中でも特に運動・体力の必要性について理解し基本的な技能を身に付けること、生涯にわたり豊かなスポーツライフの育成に必要な専門的知識と技術を身に付け、最新の研究成果について学ぶ。そうした教科内容に関する考え方を構築したうえで、講義・演習を通じて体育の教材開発につなげられるようにする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (59 立正伸/10回)</p> <p>本授業の概要を説明(第1回)し、運動領域の教科内容と教材の開発に関して体力と動作をテーマとして授業を展開する(第2-10回)。</p> <p>(13 笠次良爾/5回)</p> <p>運動領域の指導と教材開発に関して医学的な観点から授業を展開(第11-14回)し、第15回に授業全体の総括を行う。</p>	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	教科教育科目		
	教科内容と教材開発 (体育理論領域)	<p>本科目は小学校の体育科における思考・判断（知識）に関する内容、および中学校・高等学校の保健体育科における体育理論の領域に関する内容を取り上げるものである。その中でも特に運動・スポーツの文化的特性の理解や、生涯にわたる豊かなスポーツライフの育成に必要な専門的知識を身につけ、最新の研究成果について学ぶ。そうした教科内容に関する考え方を構築したうえで、講義・演習を通じて体育の教材開発につなげられるようにする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (47 井上邦子、24 高橋豪仁/3回) (共同)</p> <p>第1回目は本授業で取り扱う小学校体育科、中・高校の保健体育科の内容について概論の授業を行う。また、14・15回目は、履修生の考案した体育理論教材案について指導を行い、授業のまとめを行う。</p> <p>(47 井上邦子/6回)</p> <p>第3回目から第7回目の授業を担当し、体育原理の観点から、体育科および保健体育科における体育理論に関わる理論的な解説を行う。</p> <p>(24 高橋豪仁/6回)</p> <p>第8回目から第13回目の授業を担当し、スポーツ社会学の観点から、体育科および保健体育科における体育理論に関わる理論的な解説を行う。</p>	オムニバス・共同（一部）
	教科内容と教材開発 (保健領域)	<p>保健科教育に関する高度な専門性を身に付けることに加え、科学的知見に基づいた教材化の観点を培うことについて目標とする。講義と演習を通じて、教科保健の教科内容の主な4領域（「心身の発達と心の健康」、「健康と環境」、「生涯の予防」、「健康な生活と病気の予防」）に関する専門分野（医学、保健学、栄養学、社会学、文化人類学等）の基礎的知識や最新の研究動向等を知り、疾病の予防や健康の保持・増進等に関する考え方を養い、教材開発につなげる。さらに、教科保健における指導法（ICT機器を活用した指導技術や学習評価、等）を学び、児童生徒に対する教授能力を身に付ける。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (57 高木祐介/10回)</p> <p>本講義の概要を説明（第1回）し、保健領域の教科内容と教材の開発及び指導法に関して、小児保健、成人保健、環境保健、性教育等の主に保健学の内容をテーマとした講義を展開する（第1-5回、11-12回）。第1～12回の講義を踏まえ、第13回・14回では、学生に、教科保健の授業を想定した教材を演示させ、教員と学生でその分析を行う。それらの振り返り及び講義全体の総括を第15回で行う。</p> <p>(13 笠次良爾/5回)</p> <p>保健領域の教科内容と教材開発及び指導法に関して、学校保健及び医学的な観点から講義を展開する（第6-10回）。</p>	オムニバス

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

奈良教育大学 設置申請に係わる組織の移行表

令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
奈良教育大学				奈良教育大学				
教育学部				教育学部				
学校教育教員養成課程	255	-	1,020	学校教育教員養成課程	255	-	1,020	
計	255	-	1,020	計	255	-	1,020	
奈良教育大学大学院				奈良教育大学大学院				
教育学研究科				教育学研究科				
人間発達専攻(M)	9	-	18		0	-	0	令和4年4月学生募集停止
教科教育専攻(M)	36	-	72		0	-	0	令和4年4月学生募集停止
教職開発専攻(P)	25	-	50	<u>教職開発専攻(P)</u>	50	-	100	研究科の専攻の設置(設置届出)
				<u>伝統文化教育・国際理解教育専攻(M)</u>	20	-	40	研究科の専攻の設置(設置届出)
計	70	-	140	計	70	-	140	